

京都教育大学

2021年度 修士論文

指導困難校における中学校音楽科「導入活動」の提案

—生徒の学習意欲向上を目指して—

教科教育専攻 音楽教育専修

松村依莉

指導教員 田中多佳子

田邊織恵

凡 例

1. 実際に行った「導入活動」については、個別の通し番号[1-1]で示した。
[1-1]は、1学期の1回目の実践であることを示す。
2. 楽曲名は《 》で括って表記した。

目 次

凡例	・ ・ ・ ・ i
目次	・ ・ ・ ・ ii
序章	
第1節 問題の所在と研究の目的	・ ・ ・ ・ 1
第2節 研究対象および先行研究の検討	・ ・ ・ ・ 2
第3節 研究の方法と本論の構成	・ ・ ・ ・ 8
第1章 全生徒が意欲的に参加できる音楽科授業の提案	・ ・ ・ ・ 10
第1節 対象生徒の実態と問題点	・ ・ ・ ・ 10
第2節 導入活動の提案にあたって参考とした実践	・ ・ ・ ・ 13
第3節 本研究の目指す導入活動	・ ・ ・ ・ 16
第2章 中学校音楽科授業における導入活動の実践と分析－1学期	・ ・ ・ ・ 17
第1節 1学期の実践計画と実践内容の概要	・ ・ ・ ・ 17
第2節 1学期の実践内容の分析	・ ・ ・ ・ 18
第3節 対象生徒に行ったアンケート調査結果の分析と1学期実践のまとめ	・ ・ ・ ・ 20
第3章 中学校音楽科授業における導入活動の実践と分析－2学期	・ ・ ・ ・ 23
第1節 2学期の実践計画と実践内容の概要	・ ・ ・ ・ 23
第2節 2学期の実践内容の分析	・ ・ ・ ・ 24
第3節 対象生徒に行ったアンケート調査結果の分析と2学期実践のまとめ	・ ・ ・ ・ 26
終章 中学校音楽科における導入活動の提案	・ ・ ・ ・ 30
引用・参考文献一覧	・ ・ ・ ・ 32
巻末資料集	・ ・ ・ ・ 35

序章 研究の概要

本章第1節では、筆者が本研究に取り組むに至った動機と問題の所在、研究の目的を、第2節では、研究対象および先行研究についての検討、第3節では、研究の方法と本論の構成について述べる。

第1節 問題の所在と研究の目的

音楽科教師には、実際の授業現場において授業内容の工夫以前に、まず、音楽や音楽の授業内容に強い苦手意識を持ち、拒否反応を示したり、興味を持たなかったりする中学生を授業に意欲的に向かわせるための工夫が必須である。特に、指導困難校と呼ばれる中学校において音楽そのものの授業を行い成り立たせ、生徒の意識を向けるためには、教師側に相当の工夫や生徒の立場に立った新たな視点が要求される。

このような問題意識を持つに至ったきっかけは、筆者が2021年度より非常勤講師として勤務し始めた公立中学校でそのような実態に直面したことにある。2021年4月初回の授業時に、担当することになった第3学年3クラスの生徒計69名¹に自己紹介カードを書かせた。その際、自由記述欄に音楽授業に関するさまざまな不安等が書かれていた。また、その後の授業での落ち着きのない多様な生徒たちの様子を目の当たりにし、詳細な音楽科授業に関する調査の必要性を感じた。4月末に全生徒を対象に音楽科授業に関するアンケート調査を行った。そこから明らかになったのは、歌唱、楽器を演奏すること、楽譜や音符への苦手意識である。とりわけ歌唱や声を出すことについては特に強い抵抗感が読み取れた。また各家庭の環境や状況等から、習い事や、自ら音楽活動に携わるなどの経験に乏しい生徒も多く、音楽の授業そのものには関心が薄い。だが、その一方で、日常生活の中では、JポップやKポップ、ボーカロイド曲には積極的に親しむ生徒も多く、音楽自体に関心がない訳ではないということも明らかとなった。

以上のことから、本研究の目的は、指導困難校における中学校音楽科の授業で、全生徒に「やってみたい」という興味を持たせ、そのまま能動的な行動に結び付けるような仕組みづくりを提案することである。具体的には、音楽の授業の中で、生徒が純粋に楽しいと感じな

¹ 実施当時の第3学年の在籍数は77名であったが、欠席等の生徒がいたため、対象者は69名となった。

がら音楽に意欲的に取り組み、その連鎖が次第に次の学習過程へと繋がってゆくような流れを作るために、導入時に行う音楽活動の提案をすることにある。本研究では、そのような活動を「導入活動」と呼び、授業内容とは別に、毎時の授業冒頭に定例で行う、ウォーミングアップも兼ねた 10 分間ほどの短い音楽実践活動を指すものとする。

第 2 節 研究対象および先行研究の検討

1. 指導困難校における音楽科授業の実践例

指導困難校とは、「低学力で基礎的な生活習慣の習得にも問題のある生徒が多く、学習指導、生活指導全般にわたって教員が困難を感じている学校」（デジタル大辞泉²⁾）のことである。そうした指導困難校における中学校音楽科の授業実践に関わる先行研究となるものはないだろうか。

まず初めに国立情報学研究所の CiNii で指導困難校における音楽科のあり方に関する研究や、具体的授業実践例を探してみたがそのようなものを見出すことは出来なかった。

そこで、『教育音楽 中学・高校版』で指導困難校における音楽科の事例に関する記事を探したところ、次の 4 つの音楽科教員による実践に基づいたものがあった。伊藤ひさえ「「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part1 座談会」（2007 年 6 月号）³⁾、野田由果里・池田笑子「「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part 2 実践紹介」（2007 年 6 月号）⁴⁾、諸富祥彦「前年度荒れていた学級を持つことになりました」（2012 年 4 月号）⁵⁾、および「荒れない学級づくりの極意とは最初にやるべきことを知りたい」（2017 年 4 月号）⁶⁾などで、いずれも共通するキーワードは「荒れ」であった。

このうち諸富（2012）と諸富（2017）は「音楽教師のお悩み相談室」という連載に記載されていたもので、心理学者の立場から、また長年のスクールカウンセラーの経験に基づいて荒

²⁾ デジタル大辞泉：JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>

³⁾ 伊藤ひさえ（2007）「特集Ⅰ音楽の授業を成立させる！「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part1 座談会」『教育音楽 中学・高校版』6月号, pp. 29-32.

⁴⁾ 野田由果里・池田笑子（2007）「特集Ⅰ音楽の授業を成立させる！「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part 2 実践紹介」『教育音楽 中学・高校版』6月号, pp. 33-36.

⁵⁾ 諸富祥彦（2012）「【連載】音楽教師のお悩み相談室 第 25 回前年度荒れていた学級をもつことになりました」『教育音楽 中学・高校版』4月号, pp. 62-63.

⁶⁾ 諸富祥彦（2017）「【連載】音楽教師のお悩み相談室 第 85 回荒れない学級づくりの極意とは最初にやるべきことを知りたい」『教育音楽 中学・高校版』4月号, pp. 46-47.

れない学級づくりや生徒への対応の仕方などが述べられていた。しかし、実践内容自体は音楽科授業に限定されるものではなく、学級経営や生活面での生徒指導に関するものであった。

また、「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part1」（伊藤 2007）では、現役の中学校音楽科教諭である、卜部一恵、早野里美、真鍋淳一の座談会、「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part 2 実践紹介」（野田・池田 2007）では、現役の中学校音楽科教諭である、野田由果里、池田笑子による具体的な実践例が掲載されている。授業を滞りなく進めるためには、まず授業規律を大切にすること、他の教員とのチームワーク、日頃からの生徒とのコミュニケーション、情熱を持ち諦めずに粘り強く関わり続けること等が重要であると述べられている。これらはもちろん、指導困難校の教育においては、いずれも非常に重要なことではあるが、教師個人の教員経験や人間的な力に依存する部分が大きい。音楽科の教材や展開の工夫として、《旅立ちの日に》などの歌唱が有効だとする具体的実践例もあげられているが、この記事が書かれてから約 10 年以上経っていることもあり、今日、この楽曲を対象生徒たちが楽しんで歌う姿は想像し難い。

（野田・池田 2007）の最後には、「こうすれば荒れた授業を正常化できる、などといった特効薬はない。生きた人間を相手にしていること、目の前にいる生徒が対象であること、そして音楽科はどの教科よりも「心」に迫っていく教科だということから、その対象によって、その時、その場に応じ、随時最良の処方をしていく必要がある」（野田・池田 2007：36）、「授業だけで勝負するのではなく、日々の生徒とのコミュニケーションを大切にし、担任や学年職員との連携を密にしていくことが重要」（野田・池田 2007：36）などと述べられている。すべて正論ではあるが、本研究では、感情論でも生徒指導でもなく、音楽を用いて生徒たちを音楽科授業に向かわせる具体的手立てを考えてみたい。

2. 指導困難校・学級崩壊に関する先行研究

では、音楽科に限定せず、指導困難校・学級崩壊における実践例等に関する先行研究にはどのようなものがあるのだろうか。

『「力のある学校」の探求』の中で、盛満弥生は、子どもの参加を促す授業形態として、習熟度別授業の実践例を紹介し、その有用性について述べている（盛満 2010：131-137）。これは英語科や数学科における取り組みであり、習熟度別に分かれて少人数で授業を行うものである。1 人の教師が対応する生徒の人数が少なくなるため、指導もしやすく効果的であ

る。しかし、教科の性質上、音楽科には取り入れ難い。

『学級崩壊 予防・回復マニュアル 全体計画から1時間の進め方まで』の中で、河村茂雄は、学級の中で、教師や友人との人間関係を深めることを目的として、ゲームや遊びの有用性について述べている（河村 2000）。このようなアイスブレイキング的な活動は、本研究の目指す「導入活動」にも共通した要素が含まれると考える。

「科学への興味関心の向上と、学習への動機づけ「Science Times」を活用した理科授業」では、米田力、梶原篤らが指導困難校において生徒たちを理科授業に興味を持たせる動機づけとして「Science Times」⁷という補助教材を活用した授業の実践を報告している（米田・梶原 2014）。「Science Times」によって教科書に掲載されていない項目の写真などを用いることで、意欲的に学習に取り組む生徒の増加が見られたことを挙げている。

また、明比宏樹は「児童の学習意欲を向上・持続させる指導の在り方—国語科における「ARCS 動機づけモデル」の支援方略と「学びの教科書づくり」を取り入れた授業実践—」において、児童の学習意欲を向上させるという観点から、「ARCS 動機づけモデル」を用いた実践を報告している（明比 2021）。ARCS 動機づけモデルとは、教育心理学者のジョン・ケラーが 1984 年に提唱した、学習意欲に影響を及ぼす主要因を、「Attention（注意）」・「Relevance（関連性）」・「Confidence（自信）」・「Satisfaction（満足感）」の4つの要素から構成したものである（ケラー 2010 [2009] : 47-48）。特に「Attention（注意）」は、「面白そう、何かありそう」という学習者の興味・関心の働きを示し、これによって新奇性が生まれ、知覚的な注意を促したり、不思議さや驚きによって探究心を刺激したり、マンネリ化を避けることが含意されている（明比 2021 : 17）。本研究を教育心理学の立場から見た場合、「導入活動」はこの「注意」の側面に相当するものと位置づけられるのではないかと考える。

その他、指導困難校や学級崩壊に関する文献には、至田雅一(1999)⁸、松浦善満・中川崇(1998)⁹、深谷昌志編著(2000)¹⁰、

⁷ 米田・梶原らが独自に作成した理科の補助教材の名称。

⁸ 至田雅一(1999)「授業成立のための前提」『物理教育』47(5), pp. 297-300 日本物理教育学会。

⁹ 松浦善満・中川崇(1998)「子どもの新しい(「荒れ」と教職に関する研究—小中学校の担任教師調査結果から—」『和歌山大学教育学部実践研究指導センター紀要』8, pp. 1-10.

¹⁰ 深谷昌志編著(2000)『徹底解剖「学級の荒れ」』学文社。

船越勝編著（2001）¹¹、菅野純編著（2003）¹²、諸富祥彦編著（2004）¹³、新元朗彦・蘭千壽・越良子（2021）¹⁴等があるが、いずれも内容は前節で述べた、生徒指導の在り方、教師と生徒の人間関係等に付随する問題、保護者との関係等に関するものが中心であり、授業実践についての具体的な方法や応用可能なアプローチ方法については触れられていない。

3. 多様な「特性」を持つ生徒を対象とする音楽科教育の研究

生徒の多様な「特性」を、障害の有無からとらえた教育研究には、「インクルーシブ教育」や「ユニバーサルデザイン」といった視点がある。「インクルーシブ教育」は『日本百科全書』によると、「障害のある人、障害のない人と二分立で考えることをかならずしも前提とせず、すべての人を包容（包括）し、おのおのが教育的ニーズに応じた配慮を保障されながら、ともに学ぶ教育のあり方や仕組み。」（日本大百科全書（ニッポニカ）¹⁵とある。また、「ユニバーサルデザイン」とは、『現代用語の基礎知識』によると、「発達障害や学習障害など特別な支援を要する児童・生徒に対する配慮の視点を取り入れつつ、すべての子どもにわかりやすい授業、学習・生活しやすい環境をつくらうとすることを意味する。インクルーシブ教育の一環として実践されることが多い。」（現代用語の基礎知識）¹⁶とある。

ユニバーサルデザインの視点に立った音楽科授業の提案としては、「音楽授業のユニバーサルデザインはじめの一步」（阪井・酒井 2018）や「音楽のユニバーサルデザイン授業づくりをチェンジする 15 のポイント」（増田 2019）がある。音楽教育学者の阪井恵らは、「何よりも大切なことは、音楽の授業担当者が、児童生徒の学び方の多様性について関心と認識を

¹¹ 船越勝編著（2001）『学級崩壊・克服へのみちすじーかわる教師、かえる教室 第Ⅴ巻・中学校「人間不信の渦の中で信頼関係を取り戻す」』フォーラム・A.

¹² 菅野純編著（2003）『子どもをとりまく問題と教育第 14 巻 学級崩壊と逸脱行動』開隆堂出版株式会社.

¹³ 諸富祥彦編（2004）『クラスの荒れを防ぐカウンセリング』ぎょうせい.

¹⁴ 新元朗彦・蘭千壽・越良子（2021）「担任教師の学級崩壊克服に向けた変容プロセスの検討ー教師と生徒が承認し合う関係の構築を通してー」『上越教育大学研究紀要』41(1), pp. 57-67.

¹⁵ 日本大百科全書（ニッポニカ）：JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>

¹⁶ 現代用語の基礎知識：JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>

深めること」(阪井・酒井 2018 : 14) としている。さらに、自閉症スペクトラム障害、注意欠如・多動性障害、学習障害、発達性協調運動障害などの特性を持つ多様な児童生徒の存在を前提とした、通常学級での音楽授業における支援方法や具体的な授業展開の方法を提示し、全員参加、全員理解を目指している。

また、特別支援教育の研究者である増田謙太郎は、「ユニバーサルデザイン」とは、「子どもたちの多様性を踏まえて、一人でも多くの子どもにとって、音楽科のねらいに沿った学習がしやすくなる授業を目指していくこと。」(増田 2019 : 10) とし、その視点から音楽授業の改善を図るために、教師主体ではなく生徒の目線に立った新たな授業展開の方法とその重要性を述べている。

これら 2 つのユニバーサルデザインの考え方に基づく音楽科授業の実践方法の提案は、個々の特性に応じた細やかな支援や授業方法が、多様な生徒の学習意欲や学びの深化に繋がることを明らかにしている。しかし、実際の学校現場には、これらの研究では支援対象とされない多様な「特性」を持ち、現実的には特別な配慮や支援を必要とする生徒が少なからず存在する。特に指導困難校と呼ばれる学校ではかなりの割合を占める。そういった生徒たちを教育対象とする研究はないものだろうか。

その際、参考になるのが「実行機能」に関する森口の研究である。

発達心理学者の森口佑介は、『自分をコントロールする力 非認知スキルの心理学』(森口 2019)において、「実行機能」とは、「目標を達成するために、自分の行いを抑えたり、切り替えたりする能力のこと」である(同前 : 38)。この能力は、自制心という言葉の意味に近く(同前:6)、人間が社会で生きていくために必要不可欠な能力であるという(同前:38)。この観点からみると、筆者の担当生徒にはこの「実行機能」が低いと思われる生徒が圧倒的に多いと言える。森口によれば、その原因は、「遺伝的な要因も重要であるものの、子どもにおいては、子育てなどの環境的な要因が与える影響が非常に大きい」と指摘されている(同前:174)。しかし、子どもの実行機能を訓練する研究はまだ発展途上である(同前:174)。日本においては実行機能についての理解は十分ではないのが現状であり(同前:61)森口は、実行機能を鍛えるための訓練の手立てとして、音楽活用の有効性を説いている(同前:38)点が注目されるが、残念ながら具体的方法には触れていない。

以上から、本研究の研究対象は「実行機能」の低い生徒たちを、音楽を用いて音楽科授業に自然に導き入れることのできる「導入活動」の提案をすることとした。

4. 常時活動と導入活動

「実行機能」の低い生徒であっても、前節で述べたように彼らは音楽自体が嫌いなわけではない。まず授業内容に入る前に、生徒が音楽に興味・関心を持てるような仕組みを音楽を用いて作ることにはできないものだろうか。そこで参考としたのが、「常時活動」と呼ばれるものである。

「常時活動」の明確な定義を見出すことはできないが、当時、筑波大学附属小学校教諭であった中島寿は、『教育音楽 小学版』（2011 年 11 月号）の「特集 確かな力をつける！常時活動のアイデア」で次のように述べている。

音楽科における「常時活動」という言葉は、1990 年代の半ばごろに、この学校（筑波大学附属小学校）で使い始めたものだと言っています。もちろん、同時発生的に別の場所でも提起された可能性はありますが、「導入」という言葉も使われますが、私たちは「常時活動」を全く別の言葉として捉えています。（中島 2011：35）

このことから、常時活動という語は、1990 年代の半ば頃から筑波大学附属小学校で使い始められたこと、また、中島は導入活動とは区別していたということがわかる。

また、その筑波大学附属小学教諭の平野次郎、桐蔭学園小学校教諭の岩井智宏、所沢市立中央小学校教諭の松長誠は、『「教える」から「学びを深める」うた授業へー常時活動から歌唱共通教材、合唱へとつながる新しい学び方ー』（2021）の中で、「常時活動」について次のように述べている。

常時活動の明確な定義はありませんが、授業の冒頭や終わりに 5～10 分程度の時間で、継続的に音楽の力を積み重ねていくような活動と捉えています。今日の歌を歌ったり、リズム遊びをしたり、音楽ゲームをしたりと、様々な活動バリエーションが考えられます。この常時活動で意識したいことは、「音、音楽、そして仲間との関わり」です。特に常時活動では、教師が一方向的に指導するのではなく、子どもと音、音楽、そして仲間との関わりを意識しながら、活動を支えていくことが大切です。（平野・岩井・松長 2021：7）

すなわち、教師から見ると、「授業の冒頭や終わりに、5～10 分程度の時間で、継続的に音楽の力を積み重ねていくために行う活動」であり、また、子どもにとっては、「仲間とと

もに音や音楽に関わり、楽しみながら行う活動」として重要であるという。

こうした「常時活動」の発想は、本研究でめざす導入における仕組みづくりに、大いに参考となり、有効である。しかし、常時活動の具体的実践例は、『教育音楽』ほか、文献資料に多数掲載されているものの、大半は小学生を対象として開発されたものであり、そのまま中学生に応用することは難しい。さらに、授業の冒頭に行うことにこそ意義があると考え、本研究では「導入活動」とすることにした。

以上のことから、本研究では、中学校音楽科授業において、実行機能が低い生徒を多く含む場合でも、授業の冒頭で短い音楽を用いた「導入活動」を定例的に行うことによって、スムーズに音楽科授業に入れるような活動の提案をし、その有効性を明らかにする。

第3節 研究方法と本論の構成

実行機能が低い生徒を多く含む中学校音楽科授業においても、授業の冒頭に短い音楽を用いた「導入活動」を定例的に行うことによって、スムーズに音楽科授業に生徒たちが向かえるような活動を提案し、その有効性を検証するために、本研究では次のような方法をとる。

まず、2021 年4月より、筆者が担当することになったクラスの生徒を対象とするアンケート調査を実施し、活動を導入する前の生徒たちの音楽および音楽科授業に対するとらえ方を把握する。そして、実際に行う週1回の各授業の冒頭で、常時活動の実践例を参考に考案した活動を実践し、その様子をビデオ録画する。しばしば、生徒を対象として活動に関するアンケート調査を行う。

教師である筆者の授業記録や、生徒の記述内容、ビデオ録画に見られる生徒の様子などを総合的に分析して、活動内容と生徒側の意識変化の相関関係を明らかにし、活動の有効性を検証する。実施期間は1学期から2学期までとする。「導入活動」は実践しながら絶えず考案・修正を繰り返し、1学期が終わった時点で総合的に集計・分析を行う。それを踏まえて修正したものを2学期に試み、12月上旬までの時点で明らかになったことをまとめて結論とする。

以上から、本論文は次のように構成する。

第1章「全生徒が意欲的に参加できる音楽科授業の提案」では、対象生徒に行ったアンケート調査から公立中学校音楽科授業の実態と問題点、また音楽科授業外での生徒の実態と問題点を明らかにし、実践における「導入活動」の内容について検討する。第2章「中学校音楽科授業における導入活動の実践と分析－1学期」では、1学期中の実践内容の分

析を行い、2学期の実践に向けての改善点を明らかにする。続く第3章「中学校音楽科授業における「導入活動」の実践と分析－2学期」では、2学期の実践内容を整理・分析し、今後の課題を明らかにする。そして結論では、以上から得られた実践結果の分析と検証をふまえ、指導困難校において有効な、音楽科授業の「導入活動」の提案を行う。

第1章 全生徒が意欲的に参加できる音楽科授業の提案

本章では、中学校音楽科の授業において、全ての対象生徒が意欲的に授業に参加できるような「導入活動」の提案を行うために、第1節で、アンケート調査によって音楽科授業における対象生徒の実態と問題点、および学力など音楽科授業外での対象生徒の実態と問題点を明らかにする。つづく第2節では、「導入活動」を考案するにあたり参考にした常時活動について述べ、第3節では本研究の目指す「導入活動」について述べる。

第1節 対象生徒の実態と問題点

1. 音楽科授業に対する生徒の意識と課題

2021年度4月の初回授業時に自己紹介カードを書いてもらった。その自由記述欄に書かれた授業に対する不安等のコメント、また、授業実践の中での生徒たちの様子を見て、詳細な問題点把握の必要性を感じ、改めてアンケート調査を実施することにした。4月末の授業時に、担当の第3学年3クラスの生徒(1組22名、2組22名、3組25名)合計69名¹⁷を対象に、アンケート調査を実施した。

アンケートは音楽科授業について問うもので、質問項目は、資料1[アンケート調査の質問内容]に記した全7項目である。質問1から質問3の「好き・嫌い」に関しては、「好き・どちらかといえば好き・どちらでもない・どちらかといえば嫌い・嫌い」の5つのレベルから1つを選択した上で、その理由も記述させた。資料2[質問1. 音楽の授業は好きですか?]に対する回答は、「好き」が12名で18%、「どちらかといえば好き」が14名で20%、「どちらでもない」が23名で33%、「どちらかといえば嫌い」が10名で15%、「嫌い」が5名で7%、「未回答」が5名で7%という結果であり、「どちらでもない」という回答をした生徒が一番多かった。また、その理由について、まとめたものが資料3[質問1. 音楽の授業の好き/嫌いな理由の回答]である。

資料3からは、「どちらでもない」「嫌い」の理由の記述の多さや、記述内容からも音楽の授業に対してあまり前向きでない様子が伺える。

質問2の「音楽の授業で歌を歌うのは好きですか」、質問3の「音楽の授業以外で歌を歌

¹⁷ 実施当時の第3学年の在籍数は77名であったが、欠席等の生徒がいたため、アンケート対象者は69名となった。

うのは好きですか」に対して、授業内で歌うことが「嫌い」および「どちらかといえば嫌い」と回答した生徒が計 43 名だったのに対して、授業以外では歌うことが「好き」および「どちらかといえば好き」と回答した生徒は計 47 名であった。資料 4 [質問 2、質問 3 の歌うことに関する回答] のグラフからは、音楽の授業で歌うことは嫌いだが、音楽の授業以外で歌うことは好きであるという違いがはっきりと読み取れる。

また、その理由について、まとめたものが資料 5 [質問 2. 音楽の授業で歌うことは好きですかに対する回答]、資料 6 [質問 3. 授業以外で歌うことは好きの回答] である。

資料 5 の「公開処刑でしかない」「去年みんなの前で音程外れてると言われて恥ずかしかった」「恥をかく」「笑われたから」といった回答から、昨年度まで行われていたクラスメイトの前での歌唱試験が、生徒を音楽の授業で歌うことを嫌にさせた主な原因であったことが判明した。また、資料 6 の回答からは、授業以外であれば歌うことが純粋に好きな生徒は多いということが明らかになった。

質問 4 の「音楽の授業は、歌唱・器楽・鑑賞・創作の分野に分かれています、好きな順を教えてください。また 1 番目と 4 番目（最下位）の理由を教えてください」の回答については、資料 7 [質問 4. 好きな分野について－1 番目の回答]、資料 8 [質問 4. 好きな分野について－4 番目（最下位）の回答] から、1 番目に好きな分野は鑑賞であり、4 番目に好きな分野（最下位）は創作であることが明らかになった。

それぞれの理由についてまとめたものが資料 9 [質問 4. 好きな分野 1 番目と 4 番目（最下位）の理由] である。好きな分野 1 番目である鑑賞の理由については、1 番目であるものの授業に対する積極的な理由は少なく、「見るだけだから」「楽」「一番まし」などの理由が過半数であり、「楽譜が読めないから楽器をやりたくない」「音符が全然分からない」といった理由からも極めて消極的な様子が伺えた。また楽譜や音符に対する苦手意識も読み取れた。好きな分野 4 番目（最下位）の創作に関しては、「やったことがあるかもしれないが覚えていない」「やったことがない」など曖昧な回答に加え、「音符が分からない」「楽譜が分からない」という回答も多くあり、これらからも楽譜や音符に対する苦手意識と興味・関心の薄さが読み取れた。また、好きな分野 4 番目（最下位）に歌唱や器楽と答えた生徒の理由としては、歌唱への苦手意識に加え、新たにリコーダーの指使いに関する苦手意識を持つ生徒の存在が明らかとなった。

質問 5 「今まで受けた中学校の音楽の授業で楽しいと感じたものを教えてください」についても、鑑賞に関する記述が多く理由は、質問 4 での鑑賞に関する記述回答と類似したもので

あった。

また質問6「今まで受けた中学校の授業で難しいと感じたものを教えて下さい」については、資料10からも、リコーダーへの苦手意識、音程や高音についてなど歌唱に関する回答が多いことが明らかである。質問4での回答内容に加え、リコーダーの指使いにも苦手意識を持つ生徒が極めて多いことが明らかとなり、歌唱に関しては歌唱行為そのものをクラスメイトの前で行うことへの苦手意識に加えて、歌唱の技術的な面への苦手意識をもつ生徒も少なからずいることが判明した。

質問7「これからの音楽の授業で是非やって欲しいこと、音楽の授業がこうだったらいいのに…！という望みとその理由、逆にこれは絶対にやめて欲しいこととその理由を書いて下さい。」については、資料11より「公開の歌唱試験」を拒否する記述内容と授業内で突然指名をして発言させるのをやめて欲しいという内容が過半数を占めており、クラスメイトの前で恥をかきたくないという気持ちが顕著に表れているといえよう。

以上のアンケート調査の結果を統合すると、対象生徒は、歌唱や楽器を演奏することへの苦手意識、また楽譜や音符への苦手意識を持っていることが明らかである。とりわけクラスメイトの前での歌唱や声を出すことについては特に強い拒否反応がある。さらに、対象生徒は音楽科授業に対し、強い苦手意識を抱き、興味・関心が薄いものの、日常では、KポップやJポップ、ボーカロイド曲などの音楽に親しみ、音楽そのものに興味関心がない訳ではないことが明らかとなった。

2. 音楽科授業外における生徒の実態と問題点

本節では、序章第2節で述べた、多様な「特性」を持つ生徒という観点から、音楽科授業外での生徒の実態と問題点を整理する。

勤務校であるA校は、全生徒数が240名と、市内でも比較的小規模な中学校であるが、多くの生徒が学力や家庭環境、基本的な生活習慣等に問題を抱えており、教員側は学習指導や生活指導全般にわたり困難を感じている、いわゆる指導困難校に該当するものである。資料12は2021年度4月に実施された学力テストの結果である。第1学年から第3学年すべてが市内の平均点を大きく下回り、本研究の観察対象である第3学年は、平均点より10点ほど低い。

資料13は、経済的な理由により就学が困難であると認められる学齢児童生徒の保護者に対し、国及び地方公共団体が就学に要する諸経費を援助する就学援助率を示すものであ

る。市内における就学援助率の平均は、要保護生徒が 2.88%、準要保護生徒が 17.46%、合計 20.34%であるのに対して、A校の就学援助率は、要保護生徒が 18.3%、準要保護生徒が 35.8%、合計 54.1%と、当該都市の平均値をはるかに上回っている。また、全校生徒数の半数以上が就学援助を受け、厳しい経済状況が読み取れる。

発達心理学者の森口は「実行機能」について、実行機能には、感情の側面と思考の側面があり、感情の実行機能は目標のために欲求や衝動を制御する能力であり、思考の実行機能は目標のために習慣やくせを制御する能力である(森口 2019:88)と述べている。また、感情の実行機能は、主に問題行動とかかわり、感情の実行機能が低い子どもは、怒りやすく、クラスメイトとトラブルになりやすかったりする。思考の実行機能が高い子どもは社会的・感情的な準備性も高く、感情の実行機能も思考の実行機能も、小学校以降の学校生活に重要な役割を果たす(同前:210)。子どもの「実行機能」には、子育てなどの環境的な要因が与える影響が非常に大きいことが指摘されていることを序章第2節でも述べたが、それに加え、「貧困層やネグレクトがなされている家庭では、それ以外の家庭よりも子どもの実行機能が著しく低いことが示されており、これは、子どもがストレスを経験することが多いこと、しっかりと関係を築くことができる大人がいないことに起因している」(同前:188)とも述べている。

授業中の立ち歩き、エスケープ、物を投げる、私語等で学習に集中出来ない生徒、すなわち自制が利かない生徒たちの実態はまさに「実行機能」が低い状態であると言える。またこの原因は子どもたち本人のやる気のなさや単なるさぼり癖という問題ではなく、その背景にある育成状況や家庭環境が密接に関わっている。

以上の内容から、対象生徒の実態と問題点は音楽科授業に限らず音楽科授業外での問題も含む複合的なものである。しかし、筆者は音楽科教師として、音楽を使用し、音楽授業に無理なく生徒たちを導き入れることのできる手立てを提案したい。

第2節 導入活動の提案にあたって参考とした実践

序章第2節に述べた通り、本研究の導入活動モデルの考案にあたってまず参考にしたのが常時活動の実践例である。

1. 常時活動の実践例と問題点

樟蔭学園小学校教諭の岩井智宏はユニークな常時活動を導入していることで知られている。その著、『授業をもっとアクティブに！小学校音楽「常時活動」のアイデア100』（岩

井 2020)では、「心の解放」、「歌唱」、「器楽」、「音楽づくり・鑑賞」の4カテゴリーに分け、実践アイデアが多数提案されている。

また、音楽教育学者の石上則子の『みんなで深める！小学校音楽あそび70』（石上 2020）には、歌唱共通教材や世界の遊びうたなどと関連させた常時活動のアイデアが紹介されている。それぞれの実践方法は、子どもたちの音楽的な能力や知識を積み重ねてゆくためには大変有効ではあるが、次の3点が問題としてあげられる。第1点は、大半は小学生を対象とするもので、音楽的要素の学習と共に、心身の解放という目的も重視強調されることから、身体的な接触を伴う場合が多く、中学生という対象に応用することが難しいこと、第2点は、使用されている歌唱共通教材や伝統音楽等の楽曲は、音楽の授業に意欲的な生徒には有効であっても、音楽の授業に意欲的でなく抵抗感を抱くような中学生に応用することが難しいこと、第3点は、活動内容の大半を占める、身体的な接触を伴う活動や、発声を伴う活動はコロナ禍において実践不可能なこと、である。

本研究では、音楽科授業に意欲的ではない中学生を対象として、身体的な接触を伴わず、コロナ禍でも無理なく実践でき、音楽科授業に自然に導入できるような方法を考えたい。

2. 歌唱授業への苦手意識軽減のために

筆者はこれまで、非常勤講師を務めていた私立B中学校・高等学校での講師経験から、特別な訓練を要する発声法ではなく、各自の生来の自然な声で音楽表現することの重要性を感じてきた。音楽の授業で実践できる発声方法を開発するため、文献研究や特に声を出すことがあまり得意でない生徒でも躊躇せず声を出せる方法を考え、音楽教育の枠にとらわれず実践を行った。その中でも高校の授業内で行った、ゲームクリエイターの米光一成が考案した〈はあって言うゲーム〉¹⁸は声を出したり、声で表現したりすることに対する抵抗感を和らげる上で非常に有効であることを確認出来た。このゲームは、カードに書かれたさまざまな短いお題を、声と表情だけで演じて当て合うカードゲームである。普段人前で話すことがあまり得意でない生徒も、自然と大きな声を出し、また話す時の表情にも変化がみられた。

¹⁸ 幻冬舎から2018年に発売されたコミュニケーションカードゲーム。プレイ人数は3～8名でプレイ時間は約15分程である。現在シリーズ3まで発売されている。楽天ブックスにおける2020年年間アナログゲームランキングでは1位にランクインするなどテレビ番組やYouTubeでの紹介をきっかけに話題となったものである。ゲームの内容は資料21[※]を参照。

生徒全員がこのゲームに夢中になっている姿を目の当たりにし、まずは生徒が身近に感じ、心から楽しいと興味を持って取り組めるような活動であることが何よりも重要であると実感した。その観点から音楽の授業にあまり意欲的でない生徒でも楽しみながら取り組めるような音楽活動を検討した。

3. ボディパーカッションの実践例について

第1節で述べたように、事前の授業に関するアンケート調査からは、歌唱についての強い苦手意識が読み取れたことに加え、コロナ禍で発声を伴う実践が出来なくなった。さらに、勤務校の音楽室にはピアノ以外に使用できる楽器が一切なかった。つまり、現実的には、歌唱を避け、楽器も使用しない実践活動を考案する必要に迫られた。

最初に思いついたのは、ボディパーカッションを用いた活動である。ボディパーカッションの先行事例としては、ボディパーカッション教育考案者の山田俊之の実践がよく知られている。

『教育音楽 中学・高校版』（2021年4月号）に掲載されていた「常時活動にボディパーカッションを取り入れよう！」（山田 2021）は中・高生用の常時活動として提案されたボディパーカッションである。それらの活動は、難易度はあまり高くないものの、譜例に沿って行う、指導者と生徒の単純なリズムのコール&レスポンスであって、中学生たちが楽しんで行うことが想像出来なかったため、他の実践例を検討した。

その他の実践例には『体がすべて楽器です！ザ・ボディパーカッションほかほかパン屋さん』（山田 2007a）や『体がすべて楽器です！ザ・ボディパーカッションケチャ風お茶づけ』（山田 2007b）が挙げられる。これらは『教育音楽 小学版』に連載されていた作品の中から抜粋である。小学校の低学年から高学年、また特別支援が必要な子ども達も一緒に楽しめる教材として紹介されており、音楽が得意でない中学生にも応用可能であり、手拍子以外のさまざまな動作も含む内容である。その中から、ジャンプの動きを多く伴う《モグラ・ストンプ》（山田 2007b：58-61）を実践活動に参考として取り入れた。

詳細は本章3節に記したが、この実践の結果、歌や楽器があまり得意でない生徒でも体を動かすことには意欲を見せる生徒が多く、今後の活動内容を考えていく上での大きな手掛かりとなった。実践の際、楽譜を配布したが、「楽譜が読めない、難しい、嫌だ」など楽譜に抵抗を示す生徒が大半であったため、筆者が数小節ずつ動きの手本を示し、それを生徒に模倣させる活動に切り換えた。楽譜を読むことが出来なくても真似をすることは大半の生

徒が出来たことから、まずは生徒には楽譜を読ませようとせず、教師の真似をすること、体を使ってリズムを刻んだり、音楽を感覚的に捉えたりすることが重要であると気が付いた。初めに楽譜を読めるように教育する一般的な音楽学習の方法とは逆行しているようにもみえるが、身体的模倣活動は、音楽に強い苦手意識を持つ生徒にとっては有効な実践方法であるといえよう。

第3節 本研究の目指す導入活動

第1節で述べた事前の授業アンケートの結果や、前節で述べた導入活動初回のボディパーカッションの実践結果から、本研究で目指す「導入活動」は、全ての生徒が無理なく楽しみながら行えるようなものでなくてはならない。「無理なく」とは、たとえ「楽譜が読めない」、「リズムが分からない」など音楽の基礎的な知識が身につけていなくとも、生徒全員が平等に参加できるという意味である。

前節で述べたように、導入活動の初回に行った山田考案の《モグラ・ストンブ》の実践から、体を動かすボディパーカッションが効果的であることは明らかとなった。しかし、単調なリズムパターンの繰り返しや単純な楽曲構成は、実践が容易である反面、生徒たちが音楽活動として楽しみながら継続的に意欲をもって取り組み続けるためにはさらなる工夫が必要である。ボディパーカッションを楽しみながらも、音楽科教材として継続的・発展的に行えるような導入活動を考えたい。

打楽器奏者山本晶子の YouTube チャンネル「あっこ先生のリズム教室」¹⁹では、子どもたちに人気の楽曲に合わせたオリジナルのボディパーカッションや小物楽器を使用したリズム打ちの動画が多数配信されている。内容の一部を資料 14-1 と資料 14-2 に示した。

このような流行の楽曲に合わせたボディパーカッションは生徒たちの興味・関心を惹きつけ、楽しみながら活動することが可能ではないか。

以上の経緯を踏まえ、本研究の目指す「導入活動」を考案する際の条件は、第1に、音楽の基礎的な知識がなくても全生徒が平等に取り組めるもの、第2に、生徒たちの日常生活と身近にある音や音楽と繋がるもの、第3に、ゲーム性など生徒たちが楽しみながら活動できるものの3点とした。

¹⁹ 打楽器奏者山本晶子の YouTube チャンネル「あっこ先生のリズム教室」
<https://www.youtube.com/user/akikopercussion>

第2章 中学校音楽科授業における導入活動の実践と分析ー1学期

本章では、何も状況が分からず準備もないまま4月から授業を開始し、毎回、生徒の反応を観察しながら、試行錯誤して実施してきた全導入活動のありのままを整理し、分析することによって、2学期の授業に向けての指針を得る。毎回の授業内容は自ら記録を取るとともに、授業を通してビデオ録画を残し、それらを検証しながら、次の実践内容を修正してゆくという方法をとった。

そこで、第1節では、1学期の実践計画と実践内容を整理し、第2節では、授業記録およびビデオ録画に基づく分析を行い、第3節では、導入活動について生徒を対象に行ったアンケート調査結果の分析を行い、1学期の実践から明らかになったことをまとめる。

第1節 1学期の実践計画と実践内容の概要

本節では、自らの筆記記録に基づいて、「導入活動」と授業本編の実践内容を整理する。

担当する3クラスの授業日時は異なるが、1学期の授業回数は3クラスとも全13回であり、そのうち導入活動の実践は各クラスとも9回であった。全てのクラスでの実施内容を揃えるようにしたため、1学期に実施した導入活動と本編授業内容の全容をまとめて整理したものが資料15である。1～13回ごとに、「導入活動の内容」と「授業本編の内容」を分けて記し、「その他」には特記事項を示した。参考までに授業本編の内容も記したが、基本的に「導入活動」の内容は、先に述べたように、あえて授業本編内容とは全く切り離して考案した。

「導入活動」は、授業本編の授業時間を確保した上で可能になるものと考えているために、諸般の事情で、実施することができたのは、全13回の授業のうち、「未実施」と記した以外の、第1回から第9回までの全9回である。「導入活動」の実践を実施できた9回については、1学期第1回目の活動を[1-1]、1学期第2回目の活動を[1-2]のように示し、[1-9]まで記録した。

前半5回の「導入活動」資料15[1-1]～[1-5]では、ボディパーカッションによる活動を行った。ボディパーカッションをとりあげたのは、前章でも述べたように、事前のアンケートで歌唱についての強い苦手意識が読み取れたこと、コロナ禍で発声を伴う実践が出来なくなったこと、さらに、勤務校の音楽室にはピアノ以外に使用できる楽器が一切なかったことなどの理由による。したがって、歌唱を避け、楽器も使用しない「導入活動」を考案する

必要に迫られた。

同様の理由から、後半4回資料 15[1-6]～[1-9]はカップス²⁰による活動実践を行った。カップスとは、通常は、歌唱しながら、机の上に用意したカップを使用し、クラップ等も交えて行うリズム遊びである。ボディパーカッションに少し飽きてきた様子が見られた生徒たちに、それらをさらにステップアップしたようなリズム遊びと変化が得られること、筆者の判断で全員分のコップを用意することが可能であったことと、さらに、万が一、生徒がそれらを投げるなどの行為を行ったとしても危険性が少ないことなどの理由による。やはり、コロナ禍により「歌唱しながら」行うことが出来なかったため、楽曲を流しながら実践を行った。

資料 16 は、「導入活動」の内容に限って、[1-1]から[1-9]までの各々の詳細（活動名、取り上げた作品名、提示の仕方、活動内容、活動の手順等）を記したものである。[1-1]で楽譜を使用したことが不評だったため、[1-3]～[1-5]は YouTube の動画を用い、それに合わせて活動を行う形をとった。静止画で示したものは、その特徴的な場面の例である。

第2節 1学期の実践内容の分析

本節では、前節で述べた活動の各々について、ビデオ録画をもとに客観的な分析を試みる。

まず、前半5回資料 15[1-1]～[1-5]の導入活動では、ボディパーカッションを中心に据えた活動を行った。それらを分析したところ、次のようなことが明らかとなった。

[1-1]では、ボディパーカッションを知らない生徒が大半であったが、前章でも記述した通り、この活動から体を動かすことが好きな生徒や得意な生徒が比較的多いことが明らかになった。配布した楽譜に対して不満の声もあったため、筆者が見本を示し、模倣させる手段をとった。このことから生徒たちはたとえ楽譜が読めなくとも、動きを模倣することで、楽譜に示されたリズムを正しく刻むことが可能であることが明らかとなった。また、活動中、必要以上に大きな音を出すなど、本来とは異なるリズムを刻む生徒もいたが、活動に関して無関心な生徒がいなかった点がこの活動を継続するきっかけになった。

[1-2]においては、動きを全体で揃えるために前回の復習を行った。動きが定着してきたと実感する反面、早々に飽きてしまう生徒もあり、前回ほどの集中は見られなかった。全員

²⁰ 2012年にアメリカで制作されたミュージカル・コメディ映画「ピッチ・パーフェクト」の中で、主演のアナ・ケンドリック演じる主人公ベッカがプラスチックのカップを用いて歌を披露したシーンから、世界各国でのブームへと発展した。資料 14 の[1-6]参照。

が比較的容易に取り組める活動は、その後の興味関心を持続させることが難しいと分かった。

[1-3]では、授業本編の創作の際に使用した、《We Will Rock You》の楽曲に合わせたボディパーカッションの実践を行った。音楽に合わせることで、自然と音も揃い、音楽に乗りながら楽しんでいる生徒の様子も伺えた。[1-1][1-2]のようにボディパーカッションの音のみよりは楽しんで取り組んでいる生徒が増えた。この活動で音楽に合わせた実践は有効性が高いと感じたため、[1-4]では、生徒の中でも男女問わず人気の高い、楽曲を使用した。[1-3]よりはるかに意欲的に活動する生徒たちの姿が伺えた。生徒たちが日常で親しんでいる好みの楽曲であったということが、活動への興味関心が高まった一番の要因と言える。またテンポのよい音楽に合わせて体を動かすことで、より楽しんで活動出来たと考えられる。生徒たちがこの活動を極めて活発に行えたと感じたため、少しでも楽しみながら音楽的な要素を学ぶことは出来ないかと考え、前回と同じ楽曲を使用しながら、[1-5]では、イラストと共に音符が示されている動画を用いた。フラッシュカードも用いながら、音価の理解へ結び付けようと試みた。これをきっかけに音符について少し理解出来たという声もあったが、拒否反応を示す生徒の方が多かった。また、このあたりからボディパーカッションへの飽きも感じられた。

次に、後半4回資料 15 [1-6] ～ [1-9] の導入活動では、カップスによる活動を分析したところ次のようなことが明らかとなった。

[1-6]では、紙コップを配布する時点から生徒の興味関心が向けられていることを実感した。カップスの手の動きは、覚えるまでは難しいと感じる生徒も多少いたが、筆者の見本を模倣しながらパターン A を習得出来た生徒が大半であった。また、グループで動作を確認し合うなど、クラスメイトと共に楽しみながら活動している様子が伺えた。

[1-7]では、パターン B を行った。パターン A よりは多少リズムが複雑になるが、前回と同じ要領で習得出来ている生徒が大半であった。また、パターン A の復習を人気のアップテンポの楽曲で行った。音楽に合わせることが出来た生徒も出来なかった生徒も大変楽しんでいる様子が伺えた。

[1-8]では、前回と同様パターン A の復習を楽曲に合わせて何度か行った。前回出来なかった生徒たちも出来るまで必死に練習している様子が印象的であった。その後、パターン A・B の両方を使ってもう少しテンポの緩やかな楽曲に合わせた活動を行った。パターンの切り替えが難しいとの声もあったが、出来るようになるまで練習するなど、グループで協力しな

がら活発に活動していた。

[1-9]では、パターン A・B を使った楽曲の復習を行ったのみであったが、せっかく出来るようになったから各グループで発表し合いたいと生徒からの意見があったため、授業の余った時間でグループ別の発表を行った。前回までは、手の動きのみで精一杯という生徒も多かったが、徐々に動きや音楽に合わせることに慣れ、体全体で音楽に乗っている様子や、鼻歌を歌いながらリズムを刻んでいる生徒の様子も伺えた。発表している時も、他グループの発表を見ている時も、とても楽しんで活動に取り組んでいる生徒の様子が印象的であった。しかし、なかなか動きを覚えられない生徒も数名存在した。完璧には出来なくとも音楽に合わせて音を鳴らしたり工夫したりして楽しんでいる生徒もいたが、出来ないことを恥じ、途中でやる気をなくしてしまった生徒も 1 名いた。こうした周りから見て達成度の判断できるものは、指導者側が完成度を重視していなくとも、過度に気にしてしまう生徒にとっては負担になることが分かった。

第3節 対象生徒に行ったアンケート調査結果の分析と1学期実践のまとめ

2 学期の初回授業時に、1 学期「導入活動」についてのアンケート調査を行った。

まず、[1-1] [1-2] 《モグラ・ストンプ》、[1-3] 《We Will Rock You》、[1-4] 《Dynamite》イラスト表示、[1-5] 《Dynamite》音符表示、[1-6] ～ [1-9] カップスの5つの活動に分け、各々の活動について、5段階〔5：満足、4：やや満足、3：どちらともいえない、2：やや不満、1：不満〕で評価させた結果が資料 17-1 から 17-5 である。

1 学期の「導入活動」で最も満足度の高いものは [1-6] ～ [1-9] カップスであった。その理由は、第1に、生徒たちにとってカップを使用しリズムを刻むことは新鮮な行為であり大いに興味を引いたこと、第2に、使用した楽曲が生徒たちの好みの楽曲であったこと、第3に、生徒同士で動きを確認し合うなど仲間と共に活動する場面があり楽しく活動出来たことが、アンケートの自由記述からも読み取れた。また、クラスや家で友達と練習したという声もあり、音楽科授業での取り組みが自然と生徒たちの日常に溶け込んでいる様子も伺えた。その他の活動の満足度の順位は [1-4] 《Dynamite》イラスト表示、[1-5] 《Dynamite》音符表示、[1-3] 《We Will Rock You》、[1-1] [1-2] 《モグラ・ストンプ》と続いた。ボディパーカッションの中でのこの順位の理由は、B T S の《Dynamite》が極めて生徒の興味関心を引いたことである。そこに体を動かす動作を伴ったため、純粋に楽しいと感じた生徒が多かったと考えられる。評価の理由にも、「音楽の授業で自分たちの好きな曲が流れるのは

嬉しい」という意見や、「好きな曲に合わせて体を動かすのは楽しい」という意見も多数あった。生徒たちが日頃から慣れ親しんでいる音や音楽というものは、生徒たちに興味関心を持たせ、音楽の授業に興味を持たせるきっかけになるというヒントを得た。しかし、同じ楽曲《Dynamite》を使用しても、[1-4]と[1-5]で優劣がついた原因は音符の学習の要素が加わったことである。また、[1-3] 《We Will Rock You》と、[1-4][1-5] 《Dynamite》では、ただ知っている楽曲ととても好きな楽曲という点で評価に差がついたことがあげられる。音楽のついていない[1-1][1-2]《モグラ・ストンプ》は最下位という結果となった。

また、「導入活動全般」について資料18[導入活動全般に関する質問]を行った。回答結果は資料19に示した。全項目において約8割の生徒が「導入活動」を肯定する回答を示している。また、問5の回答についても8割近くの生徒が5.（とてもやる気がある）という結果であった。

さらに、計量テキスト分析を行うソフトKHCoderを用いて、生徒の自由記述内容の分析を行った。資料20は生徒の自由記述内容からの頻出語1から20位を表したものであるが、「楽しい」が最も多く出現している語であることが分かる。

資料21は自由記述における共起ネットワークを示したものである。共起ネットワークとは、文章中に出現する語と語が共起する関係性を直感的に捉えることが出来るものである。円が大きいほど出現回数が多いことを表す。また、語と語が線で結ばれているかどうか共起性や関連性の有無を表し、線の太さが関連の強さとして表現される。頻出語1位であった「楽しい」という語とともに、「リズム、授業、音楽、音符、体」という語に強い共起関係が見られ、活動内容について肯定的な内容が多かったことが読み取れる。

以上の結果から、1学期の「導入活動」の実践は、音楽科授業にあまり興味関心がない生徒たちを授業に意欲的に向かわせるために、大変効果的であったといえよう。特に生徒にとって身近な音楽を使用することは、授業に興味を示すきっかけになることが明らかとなった。この「導入活動」の満足度が高かった要因としては、音楽の基礎的な知識がなくとも、全員が平等に活動できることで一人一人が授業に参加しているという意識を持てたことや、楽しみながら段階的に「出来た」という達成感や満足感を得られたことなどが挙げられる。また、その後に行う授業本編へのやる気にも繋がった。

他方で、生徒やクラスの雰囲気は日によってさまざまであり、「導入活動」の効果にも差が出るため、その日のクラスの空気感に合わせて柔軟に内容を変更出来るような活動であることの必要性を痛感した。

「導入活動」の実践は指導困難校の生徒を音楽の授業に「楽しい」と肯定的に向かわせるには有効であることを確認できたので2学期も継続するものとするが、生徒の反応に合わせて柔軟かつ可変的であり、多様なものを準備するよう心掛けたい。

第3章 中学校音楽科授業における導入活動の実践と分析－2学期

本章では、2021年度2学期の実施内容を整理すると共に、実践の成果と課題を分析する。まず、第1節では、2学期の実践計画と実践内容を整理し、第2節では、授業記録およびビデオ録画に基づく分析を行い、第3節では、「導入活動」について生徒を対象に行ったアンケート調査結果の分析を行い、2学期の実践から明らかになったことをまとめる。

第1節 2学期の実践計画と実践内容の概要

本節では、自らの筆記記録に基づいて、導入活動と授業本編の実践内容を整理する。

2学期に実践した「導入活動」と授業本編の全容を資料22-1から22-3に示した。授業回数は、1組が11回、2組が10回、3組が12回であり、そのうち「導入活動」の実践は各クラスとも7回であった。学級閉鎖等により各クラスの授業時間数に差が出来たため、クラスごとに計画表を分けて作成した。資料23は、導入活動の内容に限って、[2-1]から[2-7]までの各々の詳細（活動名、取り上げた作品名、提示の仕方、活動内容、活動の手順等）を記したものである。前章にならい、実施できた時については、2学期第1回目の導入活動を[2-1]、2学期第2回目の導入活動を[2-2]と記し、[2-7]までの通し番号で示した。

2学期の導入活動についても、一番重要視したのは、全生徒が無理なく取り組める内容であるという点である。

第1回目資料22-1.2.3 [2-1]は、夏休み明け初回の授業であったため、生徒の様子を伺いながらの実践となり、アイスブレーキングも兼ねて普段の導入活動よりは長めの時間を確保した。2学期の授業本編の内容では、1学期に行えなかった、歌唱やアルトリコーダーを予定していた。授業内で声を出す活動に抵抗感を示していた生徒が多かったことを踏まえ、楽しみながら声を出す活動として、《かえるのうた》でサイレント・シンギングの実践、ハンドサインの実践、手遊び歌の実践を用いた導入活動を試みた。《かえるのうた》を用いたサイレント・シンギングの実践は、階名唱の際に「ファ」の部分は声には出さず、頭の中だけでイメージして歌い、次の段階では「レ」と「ファ」の部分は声に出さないなど難易度を徐々に上げて行った。ハンドサインを用いた曲当てクイズは、1年生の時にアルトリコーダーで練習しており全生徒が知っていると予想された、《きらきら星》、《メリーさんのひつじ》、《歓喜の歌》を用いて行った。また、手遊びうたはペアで《むすんでひらいて》を歌いながら、歌詞の「て」と「で」の箇所でお互いの手をエアーで合わせる活動を行った。

しかし、その後、校内でのコロナによる学級閉鎖があり、再び歌唱等を行うことが厳しい状況となった。そのため、本編での授業内容も鑑賞領域中心へと変更せざるを得なくなり、第2回目から第6回目までの導入活動内容は、「聞くこと」に焦点を当てることになった。1学期に行った実践活動は、生徒たちを音楽の授業に興味関心を持たせるには非常に有効であったが、クラスの雰囲気が活発になり過ぎてしまうと鑑賞の授業に入ることが難しくなると考えた。

そこで、第2回目資料 22-1. 2. 3[2-2]では、静かに落ち着いて集中させる導入活動として、サウンドスケープに焦点を当てた「聞く」活動を行った。静かにさせるまでに多少時間のかかったクラスもあったが、最終的には全クラスが静かに活動することが出来たため、「聞く」活動は継続可能と判断し、続く3回の実践資料 22-1. 2. 3[2-3]～[2-5]では、音楽的な要素の学習を考え、身近な音に加えて、珍しい音具などを用いた音当てクイズを行った。例えば、風鈴、コッ、シンギングボールなどの3つの音を聞かせて、各々について、「1. その音は何時聞こえるか（オノマトペ）」、「2. どんな素材で出来ているか」「3. どのように音を鳴らしているか（音が鳴る原理）」を考えさせて用紙に記入させた。4つ目の問いは、正しい音具名を答えさせることが目的ではなく、自分の知っている似た音の楽器名を想像して記入する生徒がいるかもしれないと予想して設けたものである。

第6回目資料 22-1. 2. 3[2-6]では、すでに3回[2-3]～[2-5]の活動を積み重ねているので、音を聞くことに慣れてきた生徒が増えたことと、授業本編で、楽器の分類法や雅楽についても学習していたため、楽器単体の音色だけではなく、楽曲の中で使用されている複数の楽器の音色を聞き分けるような活動を行った。第7回目資料 22-1. 2. 3[2-7]の頃には、声を出す活動を再開出来るようになっていたため、教材の歌唱を行う前に、生徒たちに馴染みのある楽曲の歌唱を導入活動として行った。

第2節 2学期の実践内容の分析

本節では、前節での授業内容を、ビデオ録画をもとに客観的な分析を試みる。

資料 22-1. 2. 3[2-1]では、《かえるのうた》でのサイレント・シンギング、ハンドサイン、手遊び歌の有効性が確認出来た。1学期の音楽科授業に関するアンケート調査では、授業内での歌唱や声を出す活動に苦手意識を持つ生徒が大半であったが、サイレントシンギングの実践は、馴染みのある平易な曲を使用したことや、全員で一斉に発声したことで声を出すことへの不安が解消されたこと、また、平易な曲をただ歌うだけでなく、ある特定の音を出

さないことで一種のゲーム性が生まれ、音楽科授業での発声を伴う活動であっても、生徒たちが意欲的に取り組める内容であったことが明らかとなった。

ハンドサインの実践では、まねをして手を動かしたり、小声でドレミを口ずさんだり、近くの席の生徒同士で手の形を見せ合うなどする姿も見受けられた。このことから新しい活動に取り組むことに前向きな生徒が多いことが明らかとなった。しかし、ハンドサインを「覚える」ということに苦手意識を持つ生徒が多いことも明らかとなった。

手遊びうた《むすんでひらいて》の実践は、初めはペアで活動させていたが、生徒の中からテンポを速くしてやってみたい、ペアだけでなく数名で行いたいなどいろいろな意見が出た。ここでも、ただ声を使うだけでなく、手の動きを合わせることも、また一人ではなくクラスメイトと協力できる活動には意欲的に楽しんで取り組む生徒が多いことが明らかとなった。資料 22-1.2.3[2-2] サウンドスケープの実践では、聞こえた音をすべて書き出すように指示したが、「静かやし何も聞こえない」と言った生徒も複数いたため、「友達の書くペンの音」、「グラウンドから聞こえてくる教師や生徒の声」、「風が吹く音」など具体例をいくつか挙げた。大半の生徒は聞こえた音を次々に書いていた。ここでは、静かに集中することが難しい生徒たちであっても、課題を与え、また、その課題も難しくなく興味を持てる内容であれば集中して取り組めるということが明らかとなった。中には「音が何も聞こえない」「聞こえた音が何の音かが分からない」という生徒も存在し、「聞く」ことに慣れていないと思われる生徒がいることも明らかになった。

資料 22-1.2.3 [2-3] ～ [2-5] では、資料 22-1.2.3 [2-2] の次のステップとして具体的な音を示した。使用した音具の音色は、容易に想像がつくものから、珍しいものまでさまざまであった。しかし、普段はなかなかペンを持たない生徒も積極的に配布した用紙に記入している様子が伺えた。第1回目から第3回目までの記入用紙をチェックしたが白紙の生徒は1人もおらず、各々が考えた内容を記入していた。また、言葉で上手く書けない場合はイラストを描くなど工夫している生徒もいた。最後の答え合わせでは、音具を見せるたびにさまざまな反応が見られた。生徒たちにとって珍しいものが多かったため、「聴いたことがない音」「面白い音」「聞こえた音と楽器の見た目が違う」「〇〇の音に似ている」「想像していた形と違う」「どうやって鳴らしているの」「楽器を触ってみたい」「音を鳴らしてみたい」などの発言があり、終始生徒たちは音具に興味津々であった。これまでの授業内でここまで多くの生徒たちの反応を見たのは初めてであった。特に印象的であったのが、クイズ①で使った「コッ」について、「かえる」と答えた生徒が数名いたことである。実際に「コッ」

は木製「かえる」形のスリットドラムであり、背中のギザギザをバチで擦るとかえるの鳴き声のような音がする。「かえる」と答えた生徒の中に、普段はほとんど授業に集中出来ない生徒がいた。しかし、自分で考えたことや想像したことが正解であった、分かったという事実がとても嬉しかったようで、次回もやりたいなど意欲的な発言を繰り返していた。身近な音や音楽が生徒たちの興味関心を引き付けることは1学期の「導入活動」で明らかになったが、活動の内容を工夫すれば、生徒たちにとってあまり身近でない音にでも興味関心を示すことが明らかとなった。

資料 22-1.2.3 [2-3] ～ [2-5] の実践、授業本編の「楽器の分類について」や「雅楽」の学習からさまざまな楽器や音色に興味を持つ生徒が増えてきたため、資料 22-1.2.3 [2-6] では、さらに次のステップとして楽曲の中で使用されている複数の楽器の音色を聞き分ける活動を行った。1学期の活動結果を踏まえ、生徒たちに人気のある《千本桜》を選曲した。馴染みのあるボーカロイド版ではなく、和楽器バンドの演奏音源を使用したため、和楽器と洋楽器の融合した新鮮な音色に、熱心に耳を傾けている生徒が大半であった。また、楽器の音色を聞き分けられている生徒も多く、特にソロ部分や目立つ箇所を演奏していた三味線、尺八、箏(二十五絃箏)の音色については大半の生徒が聞き取れていることが明らかとなった。

資料 22-1.2.3 [2-7] では、《花の街》を歌唱する前に、発声も兼ねて《365日の紙飛行機》を歌唱した。この楽曲については1学期の初めに少しだけ歌ったこともあり、久々であったが生徒たちも積極的に声を出し歌っていた。その後に行った《花の街》の歌唱も、楽曲自体を知っている生徒はほとんどいなかったが、積極的に声を出し歌唱していた。ここでも、生徒たちにとって身近な楽曲を使用することは、意欲的に活動に参加する一つのきっかけとなり、各々が積極的に声を出す活動に繋がることが明らかとなった。

第3節 対象生徒に行ったアンケート調査結果の分析と2学期実践のまとめ

2学期の期末考査後の授業時に、2学期「導入活動」についてのアンケート調査を行った。

まず、各活動内容に関して5段階〔5：満足、4：やや満足、3：どちらともいえない、2：やや不満、1：不満〕で評価させた結果が資料 24-1 から 24-7 である。

2学期の「導入活動」で最も満足度の高かったものは、資料 22-1.2.3 [2-3] ～ [2-5] の音当てクイズであった。その理由は、第1に、生徒たちにとって身近な音だけでなく、初めて聞く音もたくさんあり、その一つ一つの音色や音具自体が極めて興味を引いたこと、第2

に、個人で用紙に記入するクイズ形式で行ったため、純粋に楽しんで取り組めたということが評価理由の記述欄からも読み取れた。具体的には、「シンギングボールの音が神秘的な感じがしてとてもいやされた」、「コッはほんとにかえるが鳴いてるみたいで驚いた」、「石からあんなに可愛い音がしておもしろかった」「聞いたことあるなって思った音でも、実際に見たら思ってた形と違ったり、初めて聞く音があつてとても印象に残った」「いろんな音が聞こえて楽しかった」など、具体的な音具名を挙げ理由を書いている生徒が多かった。また、クイズ形式で楽しめたという記述もあり、生徒たちが興味感心を持ちながら、楽しめる活動であったことが明らかになった。

その他の活動の順位は、[2-2] サウンドスケープと [2-6] 和楽器バンドといった「聞く」活動が続き、[2-7] 《365 日の紙飛行機》の歌唱、そして [2-1] サイレント・シンギング、ハンドサイン、手遊び歌という結果となった。

[2-2] では、「いつもの音楽室だが耳を澄ませるだけでこんなにもたくさんの音が聞こえるということに気がつき驚いた」という内容の記述がとても多くあり、普段の慣れた環境の中で、生徒たちが自らの耳を使い、今まで意識していなかったさまざまな音を「聞く」経験が、「聞く」という行為に新たな興味を持たせるきっかけとなったことが明らかになった。また、「家でぼーっとしていても今までは静かだと思っていたけど、実際には本当に無音の時ってないことが分かった」「今まで全然気にならなかったけど、いる場所で聞こえてくる音が違うことに気がついた」など、たった1回数分の活動でも日常の中でかなりの変化を感じている生徒がいることも分かり、導入活動内容の考案に関して、いかに生徒の印象に残るもの、受け入れられる活動を行うかが重要であることが明らかとなった。

[2-6] では、楽器の音色単体でなくても、ソロを演奏していた楽器や目立っていた楽器の音色に関しては大半の生徒が聞き分けられるようになっていることが明らかになった。評価理由の記述欄には、「2学期になってから聞く活動が多くなったから、意外と一つ一つの楽器の音が聞こえた」、「気鳴・体鳴・膜鳴・弦鳴の種類がなんとなく音を聞いて判断出来るようになっていて、答えもあつていたし楽しかった」「結構分かったし楽しかった」「知っている曲だけど楽器の音色でこんなに曲の印象が変わることに驚いた」などと書かれていた。この活動では、今までのただ単に活動内容が楽しかったということだけでなく、生徒自身が今までに学んだことを活かし、自らの力で正解出来たという達成感が一番の満足感を得られた要因であると考えられる。

[2-7] では、「知っている曲をみんなで歌うのは楽しかった」という評価の記述内容からも、

やはり生徒たちにとって苦手意識の強い歌唱活動においても、身近な楽曲を使用し発声を促すことは、その後の歌唱活動にも極めて効果的であるということが明らかとなった。

[2-1]の3つの活動の満足度については4割から6割ほどであり、未回答が多くあった。その原因は授業当日に欠席しており未回答にした生徒が多かったことと、活動内容を覚えていない思い出せないという生徒も少なからず存在したことである。しかし、活動自体にやや不満や不満と答えた生徒がいなかったことから、生徒にとって負担のある活動ではなかったということが明らかとなった。また、活動に対して肯定的な評価理由の記述としては、「サイレントシンギングは普通に歌うよりスリルがあって面白かった」「ハンドサインは手の動きだけで音の高さが分かるからすごい」「手遊び歌は歌いながら脳トレしているみたいで楽しかった」などの理由が述べられており、意欲的に取り組めた生徒の様子も明らかとなった。

以上から、2学期の「導入活動」の実践は、1学期の「導入活動」の実践結果に加え、全生徒が平等に取り組める活動を前提に、活動内容の工夫を行えば音楽的な学びを少しずつ盛り込んでいくことも可能であるということが明らかとなった。

1学期の導入活動考案時は、いかにして生徒たちの意識をこちらに向けるか、音楽の授業はおもしろいと感じさせるために身近な楽曲を使用して生徒の興味を引く、という点が一番の課題になっていた。しかし、「導入活動」を重ねていく中で、生徒たちの中に「音楽の授業の冒頭約10分間は何か楽しいことや新しいことに取り組む時間」という意識が定着し、2学期に入り、授業開始前に「今日の授業の初めは何をするの？」などと生徒たちから頻繁に尋ねられるようになった。また授業開始のチャイムが鳴る前に着席している生徒もかなり増えた。

資料 25[アンケート調査自由記述欄の内容]からも、授業に対して肯定的な発言が読み取れるが、筆者の体感としても、日に日に生徒の中にある音楽授業への苦手意識は薄らいでいっているように感じる。そのため、1学期の実践を終えた際に考えていた、「生徒の反応に合わせて柔軟かつ可変的であり、多様なものを準備するよう心掛けたい」ということに関してはそこまで意識せずとも2学期は活動を実施することが可能になった。また、1学期には実現が難しかったであろう、聞く活動にも集中して楽しみながら取り組めたのではないかと推測する。

本研究の「導入活動」については冒頭でも述べた通り、授業本編の内容とは切り離して考案するものとしていたが、特に2学期はこのコロナ禍で図らずも授業本編の内容と「導入活

動」の内容がリンクする部分が多くあった。まず授業本編で楽器の分類について学んだことと、「導入活動」の音当てクイズを行ったことで自然と学習した内容を結びつける生徒が多く存在した。また、授業本編で世界の諸外国のさまざまな楽器の鑑賞を行った際、中国の楽器アルフーの音色を聞いて、気鳴楽器であるか、弦鳴楽器であるかで意見が割れた場面があった。再度音色を聞いてみると、一人の生徒が「息を吸ってる音が聞こえへんから、弦鳴楽器やと思う」という発言があった。その発言に「なるほど」と言った生徒もあり、もう一度音色を聞いた際には大半の生徒が「ほんまやー！息吸ってる音が全然してない」と今まででは想像もしなかった生徒たちの気付きや反応を見ることが出来た。また、雅楽の内容を扱う際も、まずは楽器の音色に注目させた。笙の音色を聞いて、一つの楽器から複数の音が聞こえると発言する生徒がいたなど、こちらも積極的に取り組む生徒の姿が伺えた。期末筆記試験の内容に雅楽で使用する楽器と、西洋の楽器、数種類の分類を行う問題を出題したが、その項目の正答率がおおよそ8割ほどであり、その他の項目よりもはるかに正答率が高かった。このことから、短い時間であっても、楽しみながら学んだ内容の方が、生徒たちにとってははっきりと記憶に残るものであるということが明らかとなった。

終章 中学校音楽科における導入活動の提案

本研究は、指導困難校における中学校音楽科の授業において、生徒の学習意欲向上を目指し、そのきっかけづくりとなる「導入活動」の内容を考案しながら、実際の学校現場での実践を行い、その記録と分析結果から、「導入活動」の提案を行うものである。

第1章では、全生徒が意欲的に参加できる音楽科授業の提案を行うために、まず対象生徒の実態について音楽科授業での問題点、音楽科授業外での問題点を明らかにした。また、「導入活動」を考案するにあたって参考とした実践について検討し、本研究の目指す「導入活動」は、「全ての生徒が平等に無理なく楽しみながら行える活動」であることを最重要要件とした。

第2章では、2021年度1学期における「導入活動」の実践と分析を行い、その結果から「導入活」の実践は、音楽にあまり興味関心がない生徒たちを音楽科授業に意欲的に向かわせるために、極めて効果的であったことが明らかとなった。また、「導入活動」を考案するにあたって、音楽の基礎的な知識がなくとも、全員が平等に活動できることで一人一人が授業に参加しているという意識を持てたことや、楽しみながら達成感や満足感を得られる活動であるということが重要であることも明らかとなった。一方で、カップスの動きがなかなか覚えられずやる気を無くしてしまった生徒がいたように、周りから見て達成度の判断できるものは、生徒によっては負担に感じ逆効果となってしまう場合があることも明らかとなった。

第3章では、2021年度2学期の「導入活動」の実践と分析を行い、1学期の「導入活動」の分析から得られた結果に加えて、全生徒が平等に取り組める活動を前提に、活動内容の工夫によっては音楽的な学びを少しずつ盛り込んでいくことも可能であるということが明らかとなった。

第2章の1学期の実践の分析結果と、第3章の2学期の実践の分析結果から、「導入活動」に必要な条件は、以下の3点が挙げられる。まず1つ目は、全生徒が無理なく平等に参加出来る活動であること。2つ目は、「出来た」や「分かった」など、小さなことでも生徒が喜びや達成感を得られる活動であること。3つ目は、クラスメイトとともにコミュニケーションを取り、音楽活動に楽しみながら参加出来ることである。

本実践研究を行うにあたり、指導困難校におけるいわゆる「教師を困らせる生徒」は、「生徒自身が最も困っている」ということに他ならないことを身を持って感じた。その「困

り」の内容はさまざまであるが、学習面での「困り」に対して、対象生徒全員が理解出来る
ところまで授業本編のレベルを落とすことは不可能である。しかし、この「導入活動」であ
れば、教師側の工夫でいかようにも改善が可能である。また音楽科はこのような活動を取り
入れやすい教科であり、生徒が楽しみながら実感を伴って学ぶ姿は、音楽科教育の原点であ
ると言える。

本研究の対象は指導困難校における生徒たちであったが、さまざまな観点から、この「導
入活動」には汎用性があると考えられる。指導困難校に限らず、中学校音楽科の授業におい
て取り入れることが可能な活動であり、また、授業本編の学びを深めることにも寄与すると
考える。しかし、その為には更なる活動内容の検討を進めていく必要がある。約5～10分
間という限られた時間の中で、どのようにすれば生徒たちが音楽的な力を身につけられる
活動を実践出来るか、より楽しみながら取り組める活動内容を考案するためには、更なる工
夫が必要である。そのためには、活動内容を考案する教師自身がさまざまな視点から音楽に
ついての知識を深めることが不可欠である。これからも中学校音楽科の教師として実践を
続けながら、生徒たちにとってよりよい「導入活動」のあり方を模索し続けていきたい。

主要参考資料

1. 主要参考文献

Jacobson, John. (2019). *RHYTHM CUPS SONG AND ACTIVITIES FOR THE MUSIC CLASSROOM*.

America:Hal Lenard.

明比宏樹 (2021)「児童の学習意欲を向上・持続させる指導の在り方—国語科における「ARCS 動機づけモデル」の支援方略と「学びの教科書づくり」を取り入れた授業実践—」『早稲田大学教職大学院紀要』13, pp. 15-28.

石上則子 (2020)『みんなで深める！小学校音楽あそび 70』明治図書.

石上則子・星野朋昭 (2016)「Part1 対談 常時活動に音楽あそびを取り入れること～音楽づくりの種をまこう」『教育音楽 小学版』4月号, pp. 22-25.

伊藤ひさえ (2007)「特集Ⅰ音楽の授業を成立させる！「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part1 座談会」『教育音楽 中学・高校版』6月号, pp. 29-32.

岩井智宏 (2016)「特集音楽あそびを常時活動に取り入れよう ドラムサークルリズムミックス大会」『教育音楽 小学版』4月号, p. 33.

—— (2020)『授業をもっとアクティブに！小学校音楽「常時活動」のアイデア 100』明治図書.

河村茂雄 (2000)『学級崩壊 予防・回復マニュアル 全体計画から1時間の進め方まで』図書文化社.

菅野純編著 (2003)『子どもをとりまく問題と教育第14巻 学級崩壊と逸脱行動』開隆堂出版株式会社.

ケラー、ジョンM.、鈴木克明監訳 (2010)『学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房. (Keller, John M. *Motivational Design for Learning and Performance The ARCS Model Approach*:Springer SMB, NEW York, 2009.)

小久保裕之 (2018)「リレー連載授業生き生き 特別支援学校・学級指導事例 第2回音楽活動の始まりは「じゃんけん」から～音楽授業のアイスブレイキング～」『教育音楽 中学・高校版』5月号, pp. 62-63.

至田雅一 (1999)「授業成立のための前提」『物理教育』47(5), pp. 297-300 日本物理教育学会.

高倉弘光・中島寿・平野次郎 (2011)「特集 確かな力をつける！常時活動のアイディアー Part1Report 筑波大学附属小学校の常時活動」『教育音楽 小学版』11月号, pp. 29-35.

- 中島寿・高倉弘光・平野次郎（2016）『音楽の力×コミュニケーションでつくる音楽の授業』東洋館出版社.
- 新元朗彦・蘭千壽・越良子（2021）「担任教師の学級崩壊克服に向けた変容プロセスの検討ー教師と生徒が承認し合う関係の構築を通してー」『上越教育大学研究紀要』41(1), pp. 57-67.
- 野田由果里・池田笑子（2007）「特集Ⅰ音楽の授業を成立させる！「荒れ」を乗り越えて、よりよい授業を！Part 2 実践紹介」『教育音楽 中学・高校版』6月号, pp. 33-36.
- 船越勝編著（2001）『学級崩壊・克服へのみちすじーかわる教師、かえる教室 第Ⅴ巻・中学校「人間不信の渦の中で信頼関係を取り戻す」』フォーラム・A.
- 平野次郎・岩井智宏・松長誠（2021）「「教える」から「学びを深める」うた授業へー常時活動から歌唱共通教材、合唱へとつながる新しい学び方ー」ヤマハ株式会社.
- 深谷昌志編著（2000）『徹底解剖「学級の荒れ」』学文社.
- 松浦善満・中川崇（1998）「子どもの新しい（「荒れ」）と教職に関する研究ー小中学校の担任教師調査結果からー」『和歌山大学教育学部実践研究指導センター紀要』8, pp. 1-10.
- 三浦孝（2013）「指導困難校での英語教育ー英語を得意にし・英語を好きにさせる指導とはー」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学編』第44号, pp. 55-84.
- 森口佑介（2019）『自分をコントロールする力 非認知スキルの心理学』講談社.
- （2021）『子どもの発達格差 将来を左右する要因は何か』PHP 研究所.
- 盛満弥生（2010）「第6章 システマティックな学校づくりーY中学校」志水宏吉編『「力のある学校」の探求』大阪大学出版会, pp. 123-139.
- 諸富祥彦編（2004）『クラスの荒れを防ぐカウンセリング』ぎょうせい.
- 諸富祥彦（2012）「【連載】音楽教師のお悩み相談室 第25回前年度荒れていた学級をもつことになりました」『教育音楽 中学・高校版』4月号, pp. 62-63.
- （2017）「【連載】音楽教師のお悩み相談室 第85回荒れない学級づくりの極意とは 最初にやるべきことを知りたい」『教育音楽 中学・高校版』4月号, pp. 46-47.
- 山内雅子（2014）「伝統的な歌唱を生かした歌唱指導の教育的意義ー小学校における実証的研究を通してー」東京学芸大学連合大学院連合学校教育学研究科博士学位論文.
- 山田俊之（2007a）『体がすべて楽器です！ザ・ボディーパーカッション ほかほかパン屋さん』音楽之友社.
- （2007b）『体がすべて楽器です！ザ・ボディーパーカッション ケチャ風お茶づけ』

音楽之友社.

—— (2021) 「常時活動にボディパーカッションを取り入れよう！」『教育音楽 中学・高校版』4月号, pp. 22-23.

米田力・梶原篤 (2014) 「科学への興味関心の向上と、学習への動機づけ「Science Times」を活用した理科授業」『奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要』23, pp. 187-190.

2. 参考視聴覚資料

「あっこ先生のリズム教室」山本晶子（打楽器奏者）のYouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/user/akikopercussion>

ボディパーカッション 《We Will Rock You》YouTube 動画

<https://youtu.be/tGODLxtjqsI>

ボディパーカッション 《Dynamite》イラスト表示 YouTube 動画

<https://youtu.be/mGlriceAIII>

ボディパーカッション 《Dynamite》音符表示 YouTube 動画

<https://youtu.be/NgsGha9w36A>

3. 参考 Web サイト

「身近な音具たち」

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/taka/index.html> (2021 年 12 月 12 日閲覧)

Japan Knowledge

<https://japanknowledge.com> (2021 年 12 月 15 日閲覧)

株式会社みやこ

<https://www.miyaco.jp/hpgen/HPB/entries/15.html> (2021 年 12 月 7 日閲覧)

巻末資料集

目次

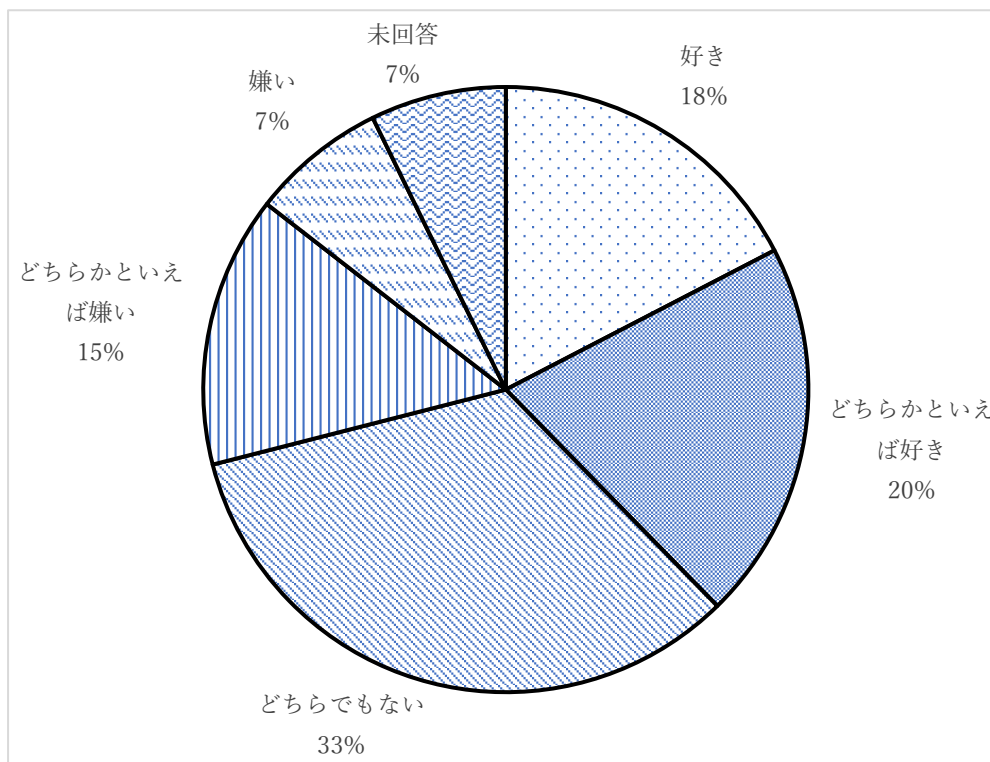
資料 1	アンケート調査の質問内容	・ ・ ・ ・ 37
資料 2	質問 1. 音楽の授業は好きですか？の回答	・ ・ ・ ・ 37
資料 3	質問 1. 音楽の授業の好き/嫌いな理由の回答	・ ・ ・ ・ 38
資料 4	質問 2. 質問 3 の歌うことに関する回答	・ ・ ・ ・ 38
資料 5	質問 2. 音楽の授業で歌うことは好きですかに対する回答	・ ・ ・ ・ 38
資料 6	質問 3. 授業以外で歌うことは好きの回答	・ ・ ・ ・ 39
資料 7	質問 4. 好きな分野について－1 番目の回答	・ ・ ・ ・ 39
資料 8	質問 4. 好きな分野について－4 番目（最下位）の回答	・ ・ ・ ・ 39
資料 9	質問 4. 好きな分野 1 番目と 4 番目（最下位）の理由	・ ・ ・ ・ 40
資料 10	質問 6. 今まで受けた中学校の授業で難しいと感じたもの	・ ・ ・ ・ 41
資料 11	質問 7. これからの音楽の授業で是非やって欲しいこと、音楽の授業が こうだったらいいのに…！という望みとその理由、逆にこれは絶対に やめて欲しいこととその理由について	・ ・ ・ ・ 41
資料 12	学力について（2021 年度 4 月に実施された学力テストの結果）	・ ・ ・ ・ 41
資料 13	就学援助について	・ ・ ・ ・ 41
資料 14-1	打楽器奏者山本晶子の YouTube チャンネル「あっこ先生のリズム教室」	・ ・ ・ ・ 42
	動画の一部をスクリーンショットしたもの	
資料 14-2	打楽器奏者山本晶子の YouTube チャンネル「あっこ先生のリズム教室」	・ ・ ・ ・ 42
	動画の一部をスクリーンショットしたもの	
資料 15	1 学期の実践内容（全 13 回）	・ ・ ・ ・ 43
資料 16	1 学期の実践内容全 13 回の詳細	・ ・ ・ ・ 44
資料 17	導入活動に関する生徒へのアンケート調査結果	・ ・ ・ ・ 49
資料 17-1	《モグラ・ストンプ》	・ ・ ・ ・ 49
資料 17-2	《We Will Rock You》	・ ・ ・ ・ 49
資料 17-3	《Dynamite》（イラスト表示）	・ ・ ・ ・ 49
資料 17-4	《Dynamite》（音符表示）	・ ・ ・ ・ 49

資料 17-5 カップス	・ ・ ・ ・ 50
資料 18 導入活動全般に関する質問	・ ・ ・ ・ 50
資料 19 導入活動全般に関する回答	・ ・ ・ ・ 50
資料 20 自由記述の頻出語 1 ～20 位 (KH Coder による解析結果)	・ ・ ・ ・ 51
資料 21 自由記述における共起ネットワーク (KH Coder による解析結果)	・ ・ ・ ・ 51
資料 22-1 1 組の 2 学期の実践内容	・ ・ ・ ・ 52
資料 22-2 2 組の 2 学期の実践内容	・ ・ ・ ・ 52
資料 22-3 3 組の 2 学期の実践内容	・ ・ ・ ・ 52
資料 23 2 学期の実践内容全 7 回の詳細	・ ・ ・ ・ 53
資料 24 導入活動に関する生徒へのアンケート調査結果	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-1 サイレントシンギング	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-2 ハンドサイン	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-3 手遊び歌	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-4 サウンドスケープ	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-5 音当てクイズ	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-6 和楽器バンド	・ ・ ・ ・ 58
資料 24-7 《365 日の紙飛行機》	・ ・ ・ ・ 59
資料 25 アンケート調査自由記述欄の内容	・ ・ ・ ・ 59

資料1 アンケート調査の質問内容

- 質問1. 音楽の授業は好きですか、その理由を教えてください。
- 質問2. 音楽の授業で歌を歌うのは好きですか、その理由を教えてください。
- 質問3. 音楽の授業以外で歌を歌うのは好きですか、その理由を教えてください。
- 質問4. 音楽の授業は、歌唱・器楽・鑑賞・創作の分野に分かれていますが、好きな順を教えてください。また1番目と4番目（最下位）の理由を教えてください。
- 質問5. 今まで受けた中学校の音楽の授業で楽しいと感じたものを教えてください。
- 質問6. 今まで受けた中学校の音楽の授業で難しいと感じたものを教えてください。
- 質問7. これからの音楽の授業では是非やって欲しいこと、音楽の授業がこうだったらいいのに…！という望みとその理由、逆にこれは絶対にやめて欲しいこととその理由を書いて下さい。

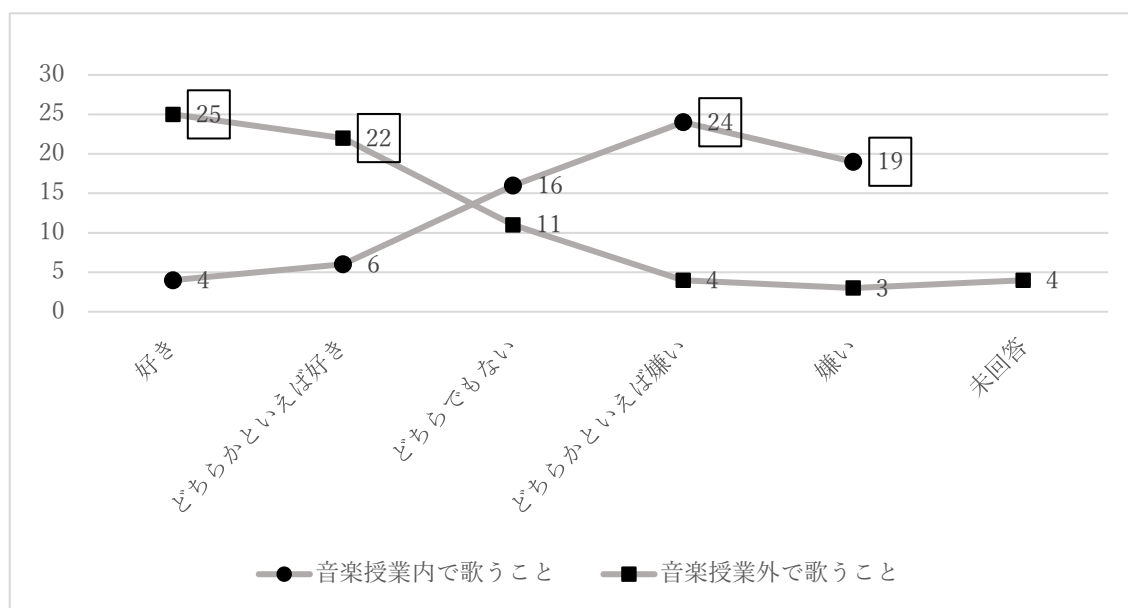
資料2 質問1. 音楽の授業は好きですか？の回答



資料3 質問1. 音楽の授業の好き/嫌いな理由の回答

好き	どちらでもない	嫌い
・音楽を聴くのが好き	・好きでも嫌いでもないから ・あんまり興味ないから ・特に何も感じないから ・普通 ・先生によって変わる ・音楽きくだけならいい ・授業の内容による	・楽譜が分からない ・楽しくない ・面白くない ・歌とかりコーダーのテストをみんなの前でやるのが嫌 ・全体的によく分かん

資料4 質問2、質問3の歌うことに関する回答



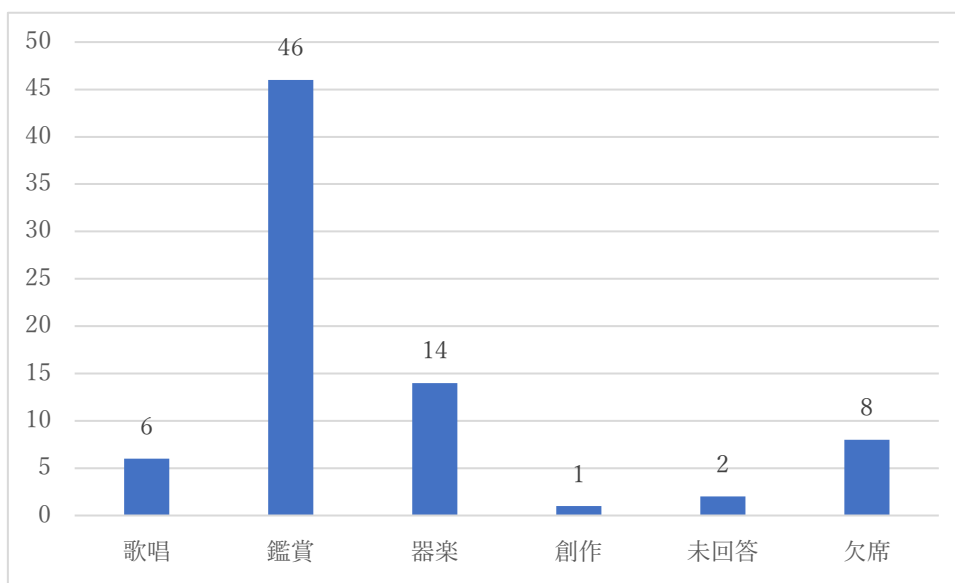
資料5 質問2. 音楽の授業で歌うことは好きですかに対する回答

好き	どちらでもない	嫌い
・歌うのが好き	・歌うのは好きだけど、授業ではいや ・歌うのは好きだけどオンチだから ・歌うのは好きだけどテストが嫌	・みんなの前でのテストが嫌 ・みんなの前で一人で歌いたくない ・公開処刑でしかない ・楽譜が読めないから嫌 ・去年みんなの前で音程外れてると言われて恥ずかしかった ・恥をかく ・笑われたから ・記号が分からない ・知らない曲ばかりでつまらない

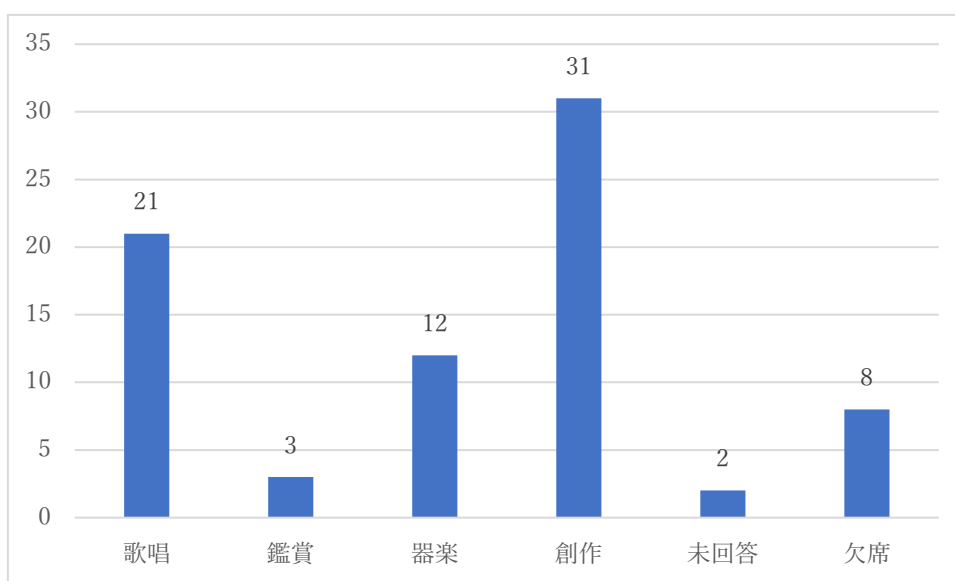
資料6 質問3. 授業以外で歌うことは好きの回答

好き	どちらでもない	嫌い
・歌うのが好き ・楽しい ・カラオケが好き ・自分の好きな歌を歌うと気分転換になる ・気分がスカッとする ・好きな曲を歌えるから (k ポップ、J ポップ, ボカロ) ・ストレス発散	・一人で歌うぶんには好き ・歌うのは好きだけどテストが嫌 ・普通 ・歌うのは好きだけどオンチやから鼻歌ぐらいしかうたわない	・自分の声が嫌い ・歌うのが嫌い

資料7 質問4. 好きな分野について－1 番目の回答



資料8 質問4. 好きな分野について－4 番目（最下位）の回答



資料9 質問4. 好きな分野1番目と4番目（最下位）の理由

好きな分野ー1番目 鑑賞の理由	好きな分野ー4番目（最下位）の理由
〈消極的な理由〉 ・見るだけだから ・楽 ・一番ましだから ・疲れないから ・見とくだけでいいから楽 ・見たらおわるから ・一番楽だから ・聞くだけ ・あんまり頭つかわなくていいから ・音楽室で歌ったりするのがイヤだから 見るだけの方が好き ・楽譜が読めないから楽器やりたくない ・音符が全然分からない ・楽器はややこしい 〈積極的な理由〉 ・面白いから好きです ・ビデオを見て、おもしろかったから ・映像を見てかく方が得意だから ・楽しい	〈創作に関しての理由〉 ・やったことがあるかもしれないけど覚えてないから ・やったことがないから ・記憶がない ・音符が分からない ・楽譜が分からない ・自分でつくったりするのが得意じゃないから。 ・自分で考えるのが苦手だから ・めんどくさい ・にがて ・音符を書くのが苦手 ・作るのが苦手 ・だるい ・難しい 〈歌唱に関しての理由〉 ・人前で歌いたくない ・歌うのがあまり好きじゃない ・歌うのははずいから ・授業で歌うのは好きではないから ・高い声がでないから ・みんなきいてるからやだ 〈器楽に関しての理由〉 ・リコーダーなどが苦手だから。 ・リコーダーとかが得意じゃない ・指使いを覚えるのが苦手だから ・リコーダーとか全然分からへん ・リコーダーきらい

資料 10 質問 6. 今まで受けた中学校の授業で難しいと感じたもの

〈歌唱に関して〉	〈器楽に関して〉	〈創作に関して〉
・歌苦手 ・授業で歌う歌 ・音程 ・知らん歌をうたうこと ・高い声がでない	・指がわからん ・リコーダー ・リコーダーとかが得意じゃない ・指使いを覚えるのが苦手だから ・リコーダーとか全然分からへん	・音符を書くのが苦手 ・記号がいや

資料 11 質問 7. これからの音楽の授業で是非やって欲しいこと、音楽の授業がこうだったいいのに…！という望みとその理由、逆にこれは絶対にやめて欲しいこととその理由について

公開の歌唱試験に関するネガティブな記述	53 名
発表等に関するネガティブな記述	51 名
無回答	6 名
欠席	8 名

※アンケート調査対象は 69 名であったが、歌唱と発表、両方に関して記述している生徒もいたため、分けて表記している。

資料 12 学力について（2021 年度 4 月に実施された学力テストの結果）

	市内平均点	A 校
3 年（5 教科）	54.9	44.4
2 年（5 教科）	55.7	48.9
1 年（2 教科）	67.8	48.1

資料 13 就学援助について

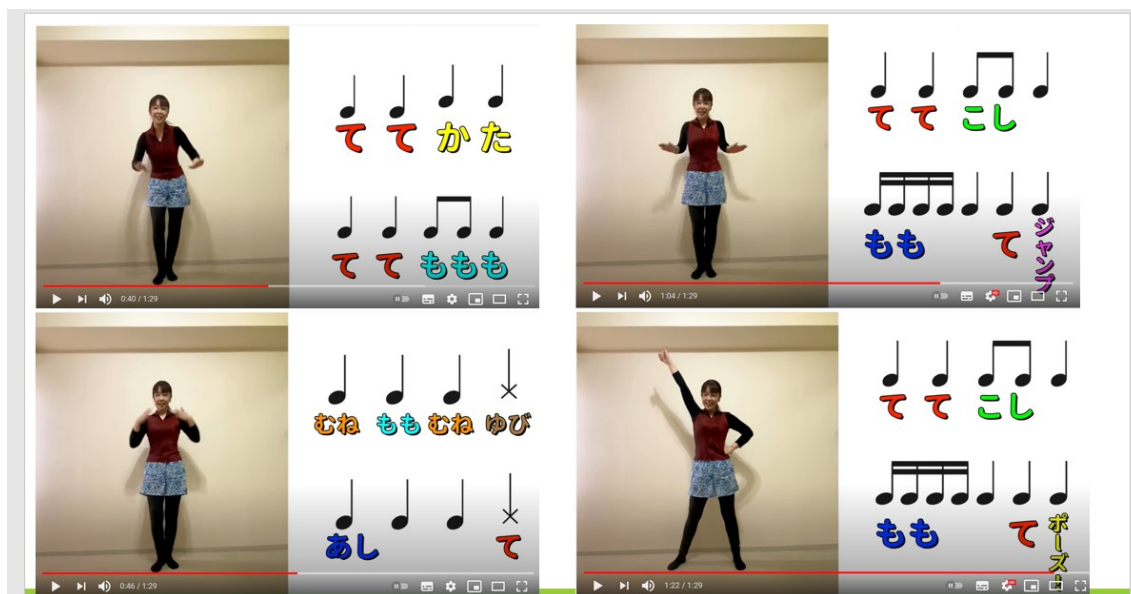
市内の就学援助率（平成 30 年度）（％）			A 校の就学援助率（令和 3 年度）（％）		
要保護生徒	準要保護生徒	要保護・準要保護生徒の合計	要保護生徒	準要保護生徒	要保護・準要保護生徒の合計
2.88	17.46	20.34	18.3	35.8	54.1

資料 14-1 打楽器奏者山本晶子の YouTube チャンネル「あっこ先生のリズム教室」
動画の一部をスクリーンショットしたもの



URL: <https://www.youtube.com/user/akikopercussion>

資料 14-2 打楽器奏者山本晶子の YouTube チャンネル「あっこ先生のリズム教室」
動画の一部をスクリーンショットしたもの



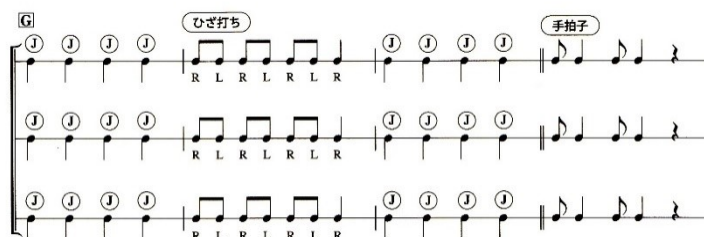
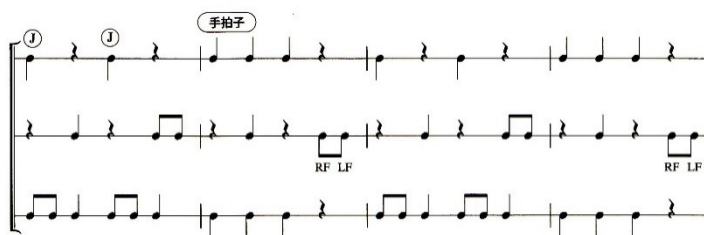
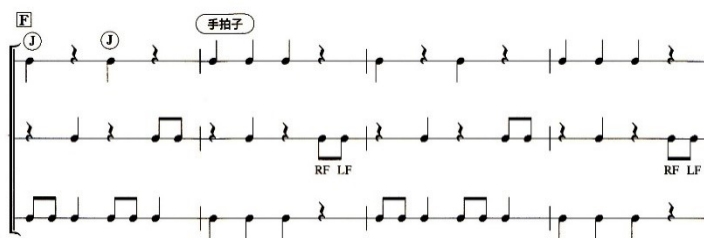
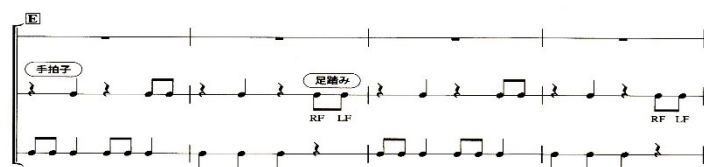
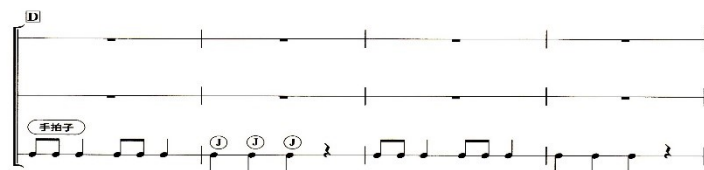
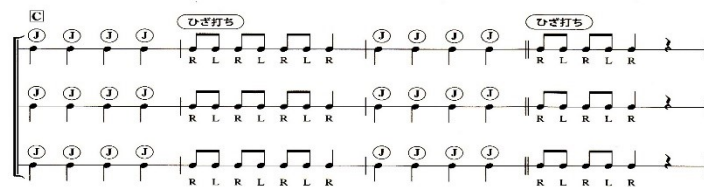
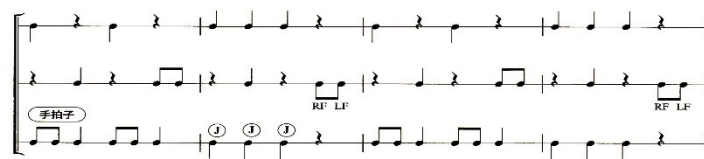
URL: <https://www.youtube.com/watch?v=IvroA4WsvII&list=RDIVroA4WsvII&index=1>

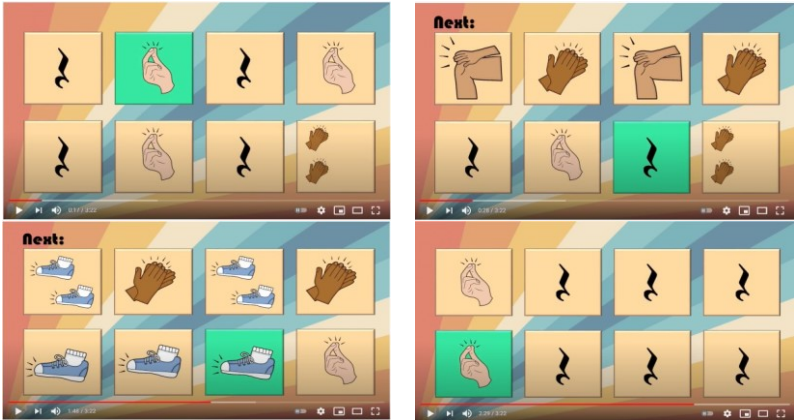
資料 15 1 学期の実践内容（全 13 回）

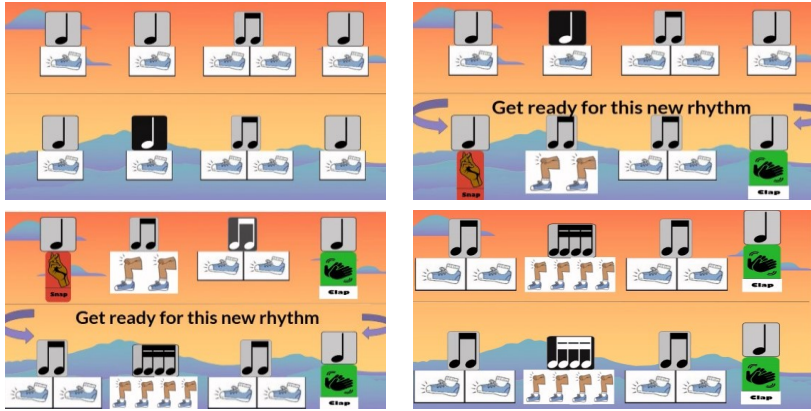
時	導入活動の内容		授業本編の内容		その他
1	未実施		歌唱	初回オリエンテーション 歌唱	自己紹介カードの記入
2	[1-1]	ボディパーカッション 《モグラ・ストンブ》	鑑賞 歌唱	オペラ 歌唱	
3	[1-2]	ボディパーカッション 《モグラ・ストンブ》	鑑賞	オペラ『カルメン』	
4	未実施		鑑賞	オペラ『カルメン』	授業の録画を開始
5	未実施		創作	「リズムアンサンブル」をつくろう	音楽授業に関するアンケート
6	[1-3]	フラッシュカード ボディパーカッション 《We Will Rock You》	創作	「リズムアンサンブル」をつくろう 音符や記号、拍子について	
7	[1-4]	ボディパーカッション 《Dynamite》	創作	「リズムアンサンブル」をつくろう 音の重なりやリズムについて	
8	未実施		歌唱	歌唱共通教材《花》について	
9	[1-5]	ボディパーカッション 《Dynamite》	歌唱	歌唱共通教材《花》について 定期考査前復習	
10	[1-6]	カップス パターン A の練習	創作	「リズムアンサンブル」をつくろう リズムのパターンについて	
11	[1-7]	カップス パターン B の練習 パターン A の復習 《夜に駆ける》	創作	「リズムアンサンブル」をつくろう オリジナルボディパーカッションの制作	
12	[1-8]	カップス パターン A を楽曲に合わせて パターン A 《夜に駆ける》 パターン A とパターン B 《パプリカ》	創作	「リズムアンサンブル」をつくろう オリジナルボディパーカッションの制作	
13	[1-9]	カップス パターン A とパターン B 《パプリカ》 グループごとに発表	創作	「リズムアンサンブル」をつくろう オリジナルボディパーカッションの制作	

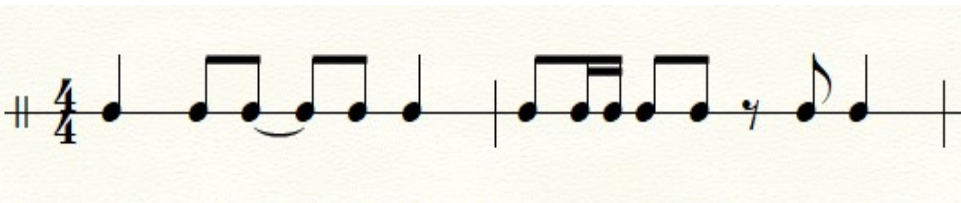
資料 16 1 学期の実践内容全 13 回の詳細

[1-1] ボディパー カッション 《モグラ・ス トンプ》 〔作品につ いて〕 4/4 拍子、 全 3 パート、 40 小節から なるボディ パーカッ ション作品。 主な動き ・ジャンプ ・手拍子 ・足踏み (右・左) ・ひざ打ち (右・左)	活動の手順 1. パート①、②、③それぞれのリズムと全パート共通のリズムを順番に指導者の示す見本を模倣する 2. 全員でパート①、②、③を最後まで通す 山田 俊之 作曲  ※①は、両足でジャンプ。
--	--



[1-2] ボディパー カッション 《モグラ・ス トンプ》 前回の続き	活動の手順 1. 前回の復習を行う 2. クラスを3つに分けて楽譜通りに通す 3. パートを入れ替えて行う 4. 最後は自分の好きなパートを選んで通す
[1-3] ボディパー カッション 《We Will Rock You》 〔作品につ いて〕 4/4 拍子 1 番のみ 〔主な動き〕 ・手や体、机 などを使用し、リズムを 刻む	YouTube 《We Will Rock You》一部分のスクリーンショット  U R L : https://youtu.be/tGODLxtjqsl 活動の手順 1. イラストと動きの確認を行う 2. 動画に合わせて最後まで通す
[1-4] ボディパー カッション BTS 《Dynamite》 イラストの み 〔作品につ いて〕 4/4 拍子 〔主な動き〕 ・手拍子 ・フィンガー スナップ ・足踏み(右・ 左) ・ひざ打ち (右・左)	YouTube 《Dynamite》一部分のスクリーンショット  URL:https://www.youtube.com/watch?v=mG1riceAIII 活動の手順 1. イラストと動きの確認を行う 2. 動画に合わせて最後まで通す

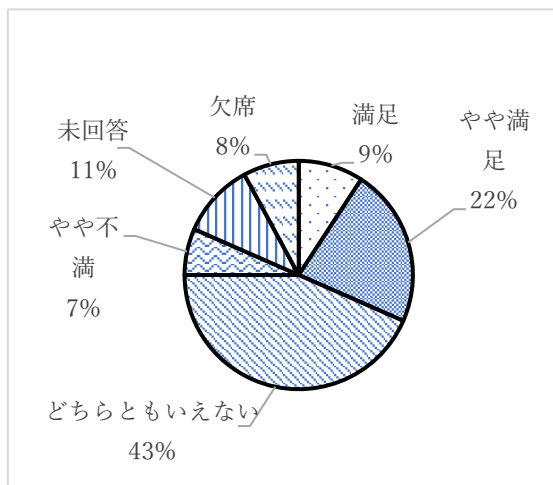
[1-5] ボディパー カッション 《Dynamite》 音符あり フラッシュ カード 〔作品につ いて〕 4/4 拍子 〔主な動き〕 ・手拍子 ・フィンガー スナップ ・足踏み(右・ 左) ・ひざ打ち (右・左)	YouTube 《Dynamite》 音符あり 一部分のスクリーンショット  U R L : https://youtu.be/NgsGha9w36A 活動の手順 1. イラストと動きの確認を行う 2. 動画に合わせて最後まで通す 3. フラッシュカードに書かれた音符や休符とイラストを結びつける
[1-6] カップス パターン A の練習 〔使用する もの〕 紙コップ 1 つと机 〔主な動き〕 ・手拍子 ・机を鳴らす ・紙コップで 机を鳴らす	パターンAのリズム譜  具体的な手の動き パターンA  イラスト:株式会社みやこ URL: https://www.miyaco.jp/hpgen/HPB/entries/15.html 活動の手順 1. 指導者の示したパターンAの動きを模倣する 2. 繰り返し練習し、定着させる

	* カップスは下記のような動きが組み合わさって出来ている Here is what each cup icon means: <table border="0"> <tbody> <tr> <td> = Tap top of cup to table</td><td> = Pat bottom of cup with L hand as it sits on the table</td></tr> <tr> <td> = Pick up cup, pat bottom of cup with L hand</td><td> = Pat bottom of cup with R hand as it sits on the table</td></tr> <tr> <td> = Slide cup on table from L to R</td><td> = Pat bottom of cup with both hands as it sits on the table</td></tr> <tr> <td> = Tap side bottom of cup to table</td><td> = With cup on table, slide in circle</td></tr> <tr> <td> = Tap top of cup to table L</td><td> = Clap hands above cup</td></tr> <tr> <td> = Tap top of cup to table R</td><td> = Pick up cup with R hand, thumb toward table</td></tr> <tr> <td> = Tap top of cup to table center</td><td> = Pat top of cup with L hand</td></tr> <tr> <td> = Pass cup to neighbor on R or partner across</td><td> = Place bottom of cup on table</td></tr> <tr> <td> = Pat table next to cup with L hand</td><td> = Grab bottom of cup with L hand</td></tr> <tr> <td> = Pat table next to cup with R hand</td><td> = L hand set cup down bottom up</td></tr> </tbody> </table> Jacobsin, John. <i>RHYTHM CUPS SONGS AND ACTIVITIES FOR THE MUSIC CLASSROOM</i>. America: Hal Lenard	 = Tap top of cup to table	 = Pat bottom of cup with L hand as it sits on the table	 = Pick up cup, pat bottom of cup with L hand	 = Pat bottom of cup with R hand as it sits on the table	 = Slide cup on table from L to R	 = Pat bottom of cup with both hands as it sits on the table	 = Tap side bottom of cup to table	 = With cup on table, slide in circle	 = Tap top of cup to table L	 = Clap hands above cup	 = Tap top of cup to table R	 = Pick up cup with R hand, thumb toward table	 = Tap top of cup to table center	 = Pat top of cup with L hand	 = Pass cup to neighbor on R or partner across	 = Place bottom of cup on table	 = Pat table next to cup with L hand	 = Grab bottom of cup with L hand	 = Pat table next to cup with R hand	 = L hand set cup down bottom up
 = Tap top of cup to table	 = Pat bottom of cup with L hand as it sits on the table																				
 = Pick up cup, pat bottom of cup with L hand	 = Pat bottom of cup with R hand as it sits on the table																				
 = Slide cup on table from L to R	 = Pat bottom of cup with both hands as it sits on the table																				
 = Tap side bottom of cup to table	 = With cup on table, slide in circle																				
 = Tap top of cup to table L	 = Clap hands above cup																				
 = Tap top of cup to table R	 = Pick up cup with R hand, thumb toward table																				
 = Tap top of cup to table center	 = Pat top of cup with L hand																				
 = Pass cup to neighbor on R or partner across	 = Place bottom of cup on table																				
 = Pat table next to cup with L hand	 = Grab bottom of cup with L hand																				
 = Pat table next to cup with R hand	 = L hand set cup down bottom up																				
[1-7] カップス パターン B の練習 パターン A の復習《夜に 駆ける》 〔使用する もの〕 紙 コップ 1 つ 机 〔主な動き〕 ・手拍子 ・机を鳴らす ・紙コップで 机を鳴らす	パターン B のリズム譜  * オリジナルの動きを作成したためイラストはなし 活動の手順 1. 指導者の示したパターン B の動きを模倣する 2. 繰り返し練習し、定着させる 3. パターン A を《夜に駆ける》に合わせて復習する																				

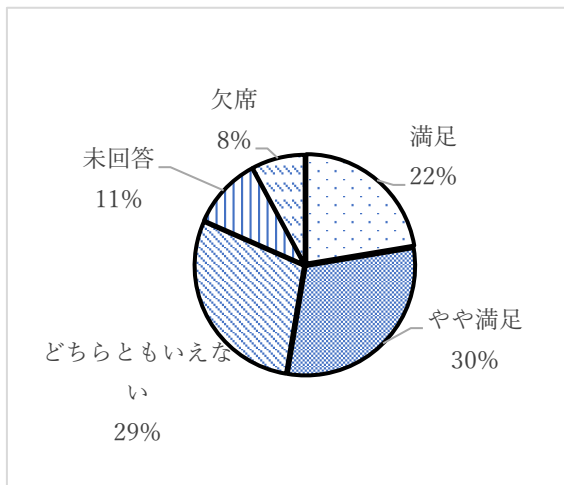
[1-8] カップス パターン A の復習 《夜に 駆ける》 パターン A・ B パブリカ》	活動の手順 1. パターン A を《夜に 駆ける》に合わせて復習する 2. パターン A・B 両方を使って《パブリカ》に合わせる練習をする
[1-9] カップス パターン A・ B 《パブリカ》 (グループ ごとに発表)	活動の手順 1. パターン A・B 両方を《パブリカ》に合わせる 2. 授業の余った時間でグループ別の発表を行う

資料 17 導入活動に関する生徒へのアンケート調査結果

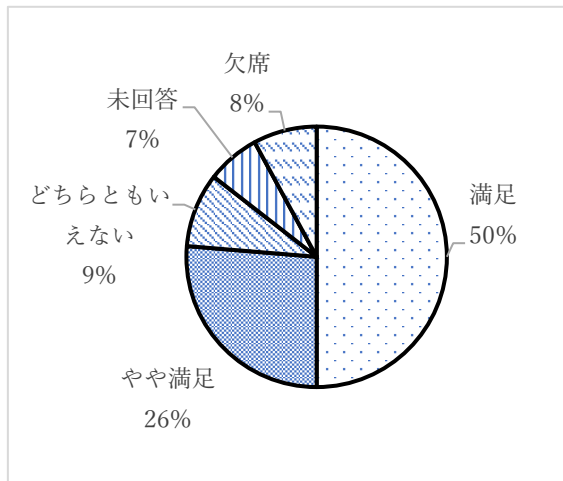
資料 17-1 《モグラ・ストンブ》



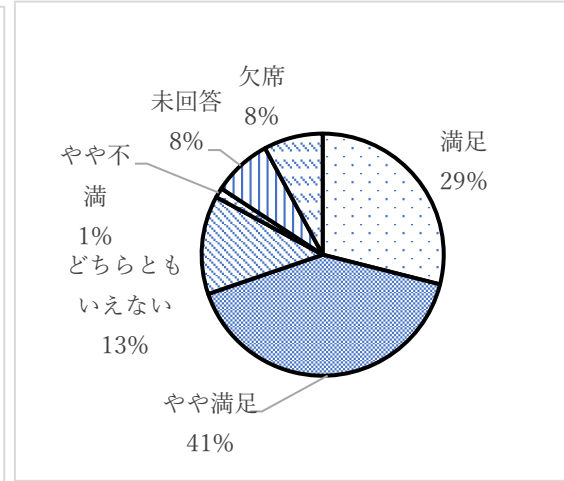
資料 17-2 《We Will Rock You》



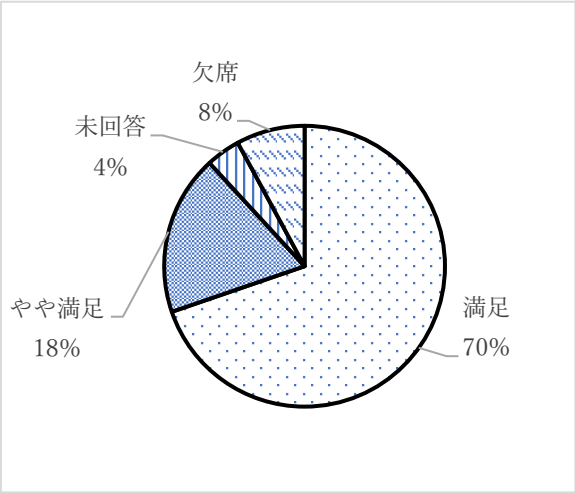
資料 17-3 《Dynamite》(イラスト表示)



資料 17-4 《Dynamite》(音符表示)



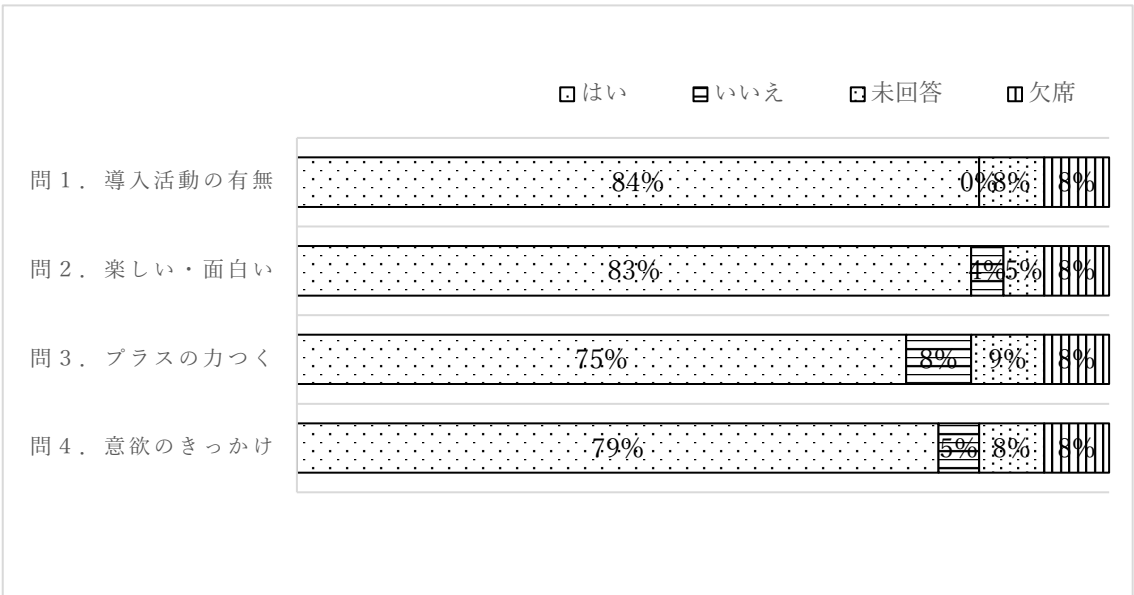
資料 17-5 カップス



資料 18 導入活動全般に関する質問

- 問 1. このような活動はこれからもあった方がよいか→はい・いいえ
- 問 2. 活動内容の中に楽しいや面白い、興味を持てるものはあったか→はい・いいえ
- 問 3. 活動があることで、授業の内容にプラスの力が自分についていると思うか→はい・いいえ
- 問 4. 活動はあなたにとって音楽の授業を更に意欲的に受けるきっかけになるか→はい・いいえ
- 問 5. 現時点でのあなたの音楽の授業への意欲を 5 段階で表して下さい [5. 4. 3. 2. 1]

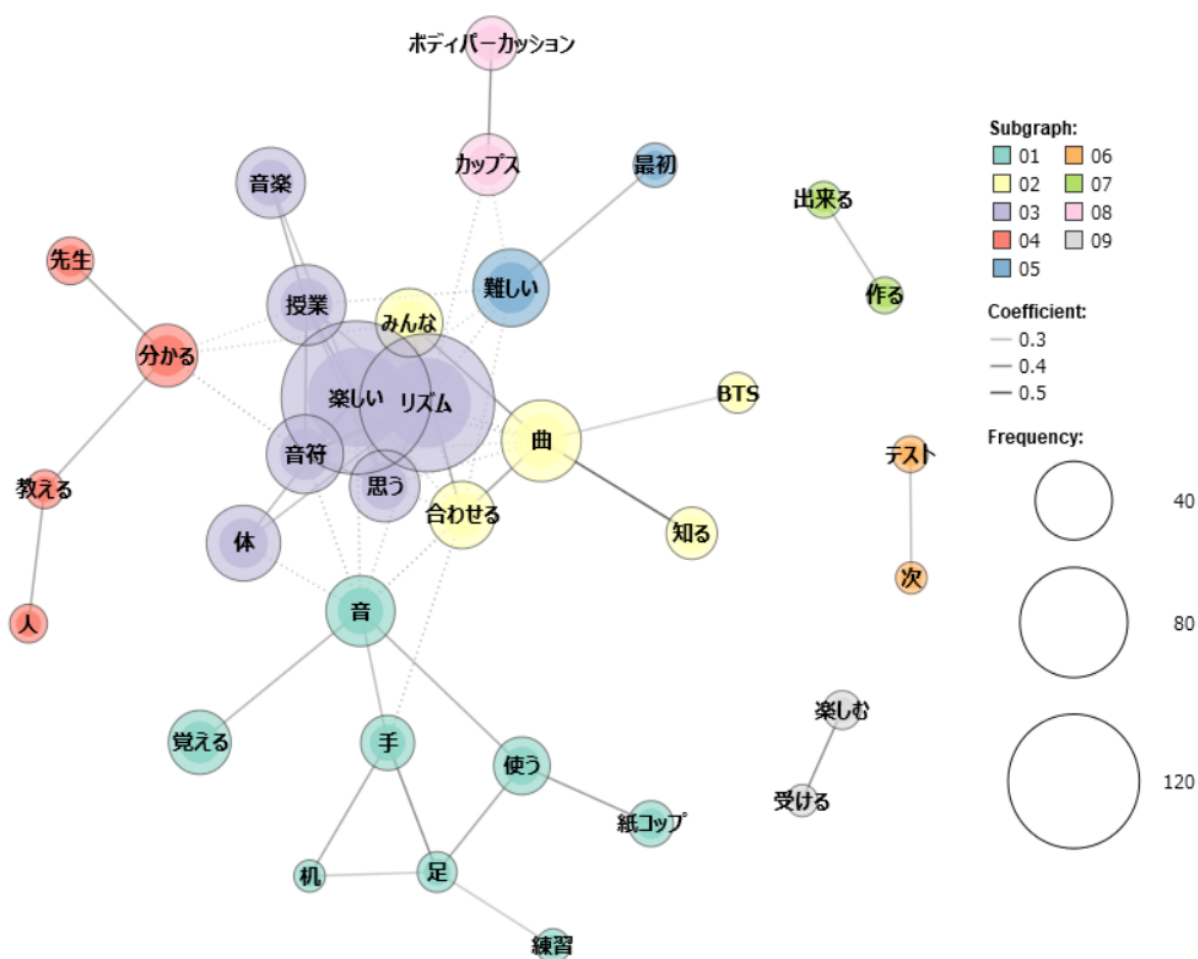
資料 19 導入活動全般に関する質問の回答



資料 20 自由記述の頻出語 1～20 位 (KH Coder による解析結果)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
①楽しい	157	⑪音楽	32
②リズム	127	⑫みんな	30
③曲	43	⑬合わせる	29
④授業	42	⑭覚える	26
⑤音符	40	⑮分かる	25
⑥難しい	39	⑯カップス	24
⑦体	37	⑰使う	21
⑧思う	33	⑱手	19
⑨音	32	⑲ボディパーカッション	18
⑩音楽	32	⑳知る	17

資料 21 自由記述における共起ネットワーク (KH Coder による解析結果)



資料 22-1 1組の2学期の実践内容

時	導入活動の内容		授業本編の内容		その他
1	[2-1]	サイレントシンギング ハンドサイン	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	1学期導入活動アンケート
2	[2-2]	サウンドスケープ	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
3	未実施		鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
4	未実施		鑑賞	ミュージカル	
5	[2-3]	音当てクイズ①	鑑賞	ミュージカル	
6	[2-4]	音当てクイズ②	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
7	[2-5]	音当てクイズ③	鑑賞	楽器の分類について	
8	未実施		鑑賞	雅楽《越天楽》	
9	[2-6]	和楽器バンド《千本桜》	鑑賞	雅楽《越天楽》	
10	未実施		歌唱	歌唱共通教材《花の街》	
11	[2-7]	歌《365日の紙飛行機》	歌唱	歌唱共通教材《花の街》	

資料 22-2 2組の2学期の実践内容

時	導入活動の内容		授業本編の内容		その他
1	[2-1]	サイレントシンギング ハンドサイン	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	1学期導入活動アンケート
2	未実施		鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
3	[2-2]	サウンドスケープ	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
4	[2-3]	音当てクイズ①	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
5	[2-4]	音当てクイズ②	鑑賞	楽器の分類について	
6	[2-5]	音当てクイズ③	鑑賞	雅楽《越天楽》	
7	[2-6]	和楽器バンド《千本桜》	鑑賞	雅楽《越天楽》	
8	未実施		歌唱	歌唱共通教材《花の街》	
9	[2-7]	歌《365日の紙飛行機》	歌唱	歌唱共通教材《花の街》	
10	[※]	はあっていうゲーム			

資料 22-3 3組の2学期の実践内容

時	導入活動の内容		授業本編の内容		その他
1	[2-1]	サイレントシンギング ハンドサイン	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	1学期導入活動アンケート
2	[2-2]	サウンドスケープ①	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
3	未実施		鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
4	未実施		鑑賞	ミュージカル	
5	[2-3]	音当てクイズ①	鑑賞	ミュージカル	
6	[2-4]	音当てクイズ②	鑑賞	交響詩「わが祖国」より モルダウ	
7	[2-5]	音当てクイズ③	鑑賞	楽器の分類について	
8	未実施		鑑賞	雅楽《越天楽》	
9	[2-6]	和楽器バンド《千本桜》	鑑賞	雅楽《越天楽》	
10	[※]	はあっていうゲーム			
11	未実施		歌唱	歌唱共通教材《花の街》	
12	[2-7]	歌《365日の紙飛行機》	歌唱	歌唱共通教材《花の街》	

資料 23 2 学期の実践内容全 7 回の詳細

[2-1] サイレントシン ギング ハンドサイン 手遊びうた	サイレントシンギング活動の手順 1. 《かえるのうた》を階名唱する。 「♪ドレミファミレド～・・・」 次は「ファ」を抜いて歌う。 その次は「ファとレ」を抜いて歌う。 2. 歌詞で歌いながら「レとファ」の箇所を抜いて歌う ハンドサイン活動の手順 1. ハンドサイン（手の形を示したプリントを配布） 2. ハンドサインで曲当てクイズ 指導者がハンドサインで示した曲を当てる （1年生の時にアルトリコーダーの課題として、きらきら星・メリーさんのひつじ・歓喜の歌を練習しているため、全員が知っているであろうこれらの曲を選んだ。） 手遊びうたの手順 1. ペアで《むすんでひらいて》を歌う 歌詞の「てとで」の箇所でお互いの手をエアーで合わせる
[2-2] サウンドスケ ープ	活動の手順 1. 用紙を配布する 2. 音楽室内外で聞こえる音をすべて書き出すよう指示する 3. 最後に書き出せた音の個数を数えて記入 3年()組()番 氏名() ① 聞こえた音をすべて書いてみましょう。 聞きとれた音の数()個

[2-3]
音当てクイズ①

活動の手順

1. 目を瞑り、筆者の鳴らす音を聞く
2. 用紙のそれぞれの項目を書く。
 - ・ なんと聞こえますか？
(オノマトペを答える)
 - ・ 素材は何だと思えますか？
 - ・ どうやって鳴らしていると思えますか？
 - ・ その名前はズバリ…！

以上の内容を全3問行った。

〔使用した楽器・音具〕

- 1 問目
風鈴 (日本)
- 2 問目
コッ (タイ)
- 3 問目
シンギングボール (ネパール)

最後に生徒の前で楽器・音具を鳴らして答え合わせをした。

♪第1回 音あてゲーム♪ 3年()組()番 氏名()

♪第1問目 レベル★☆☆

なんと聞こえますか？	素材は何だと思えますか？	どうやって鳴らしていると思えますか？	その名前はズバリ…！

♪第2問目 レベル★★☆

なんと聞こえますか？	素材は何だと思えますか？	どうやって鳴らしていると思えますか？	その名前はズバリ…！

♪3問目 レベル★★★

なんと聞こえますか？	素材は何だと思えますか？	どうやって鳴らしていると思えますか？	その名前はズバリ…！

風鈴



コッ



シンギングボール



[2-4]
音当てクイズ②

活動手順は前回と同様

〔使用した楽器・音具〕

1 問目

カシシ (ブラジル)

2 問目

パードコール (日本)

3 問目

でんでん太鼓 (日本)

※4 問目

ガラガラ (日本)

オノマトペのみ

カシシ



パードコール



でんでん太鼓



ガラガラ



[2-5]
音当てクイズ③

活動手順は前回と同様

〔使用した楽器・音具〕

1 問目

バリンビン (フィリピン)

2 問目

サヌカイト (日本)

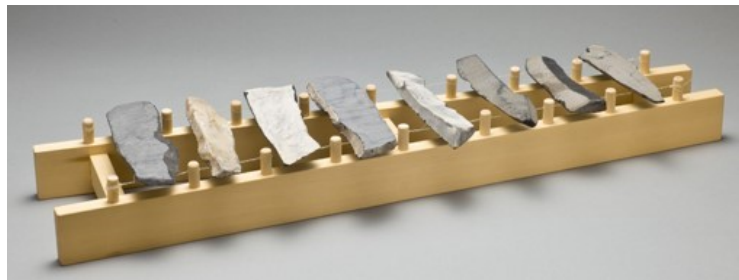
3 問目

サンザ〔親指ピアノ〕(タンザニア)

バリンビン



サヌカイト



サンザ



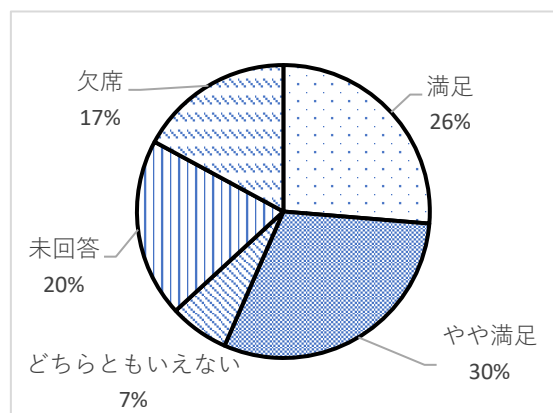
[2-6] 和楽器バンド 《千本桜》	活動の手順 日本の8人組ロックバンド「和楽器バンド」が演奏する《千本桜》を聴き、演奏で使用されている楽器の写真を選ぶ。 その後、映像も見ながら使われている楽器を確認し、答え合わせをする。 ♪演奏に使用されている楽器を当てよう♪ ○実際に使用されている楽器 3年()組()番 氏名() これから聴く楽曲の中に使用されていると思う楽器に丸をつけましょう！ 正解した数()  ドラム  箏  ピアノ  尺八  和太鼓  フルート  エレキベース  ヴァイオリン  三味線  エレキギター  トランペット
[2-7] 歌唱 《365 日の紙飛行機》	活動の手順 1. 授業で扱う楽曲《花の街》の歌唱前に、発声も兼ねて1 番のみを斉唱で歌う
[※] はあっていうゲーム	活動の手順 6、7人ずつのグループに分かれて、お題カードに書かれた演技を順番に行い、どれを演じたかお互いに当て合い獲得ポイントを競う。 お題カードの例 はあ A なんて?の「はあ」 B 力をためる「はあ」 C ほうぜんの「はあ」 D 感心の「はあ」 E 怒りの「はあ」 F とほけの「はあ」 G おどろきの「はあ」 H 失態の「はあ」 がんばれ A 見下して「がんばれ」 B 軽く「がんばれ」 C 熱く「がんばれ」 D 明るく「がんばれ」 E 遠くに向かって「がんばれ」 F 怒って「がんばれ」 G 色っぽく「がんばれ」 H つらいけど…「がんばれ」 なんで A 手品におどろいて「なんで」 B 不機嫌に「なんで」 C 自分を責めて「なんで」 D ありえない!の「なんで」 E ハニックになって「なんで」 F わがままの「なんで」 G フラれたときの「なんで」 H カレー屋の注文で「なんで」 さあ A とほけた「さあ」 B 料理をふるまう「さあ」 C 物語の始まりに「さあ」 D お客を集めるときの「さあ」 E 冷たく「さあ」 F 実況中継の「さあ」 G 帰るときの「さあ」 H そよ風の「さあ」

[2-3]～[2-5] 音具の画像引用サイト「身近な音具たち」京都教育大学 田中多佳子研究室

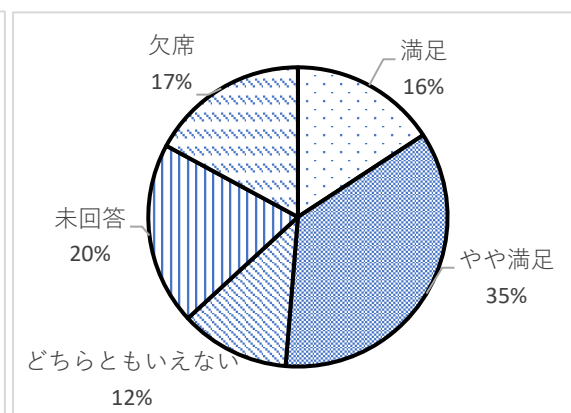
URL: <http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/taka/index.html>

資料 24 導入活動に関する生徒へのアンケート調査結果

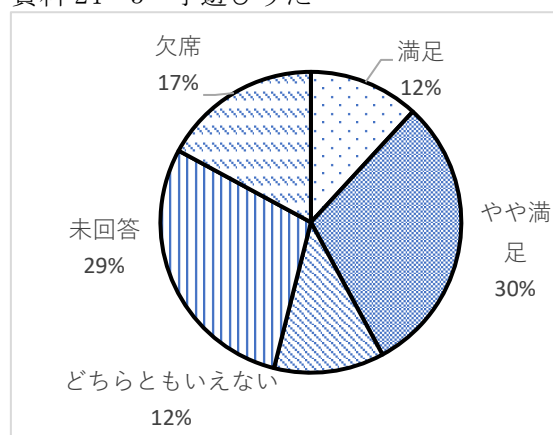
資料 24-1 サイレント・シンギング



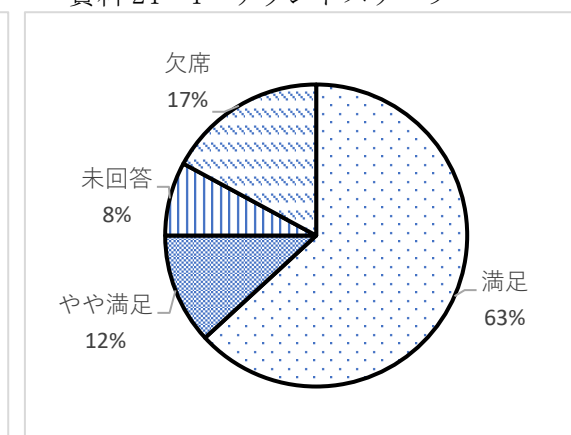
資料 24-2 ハンドサイン



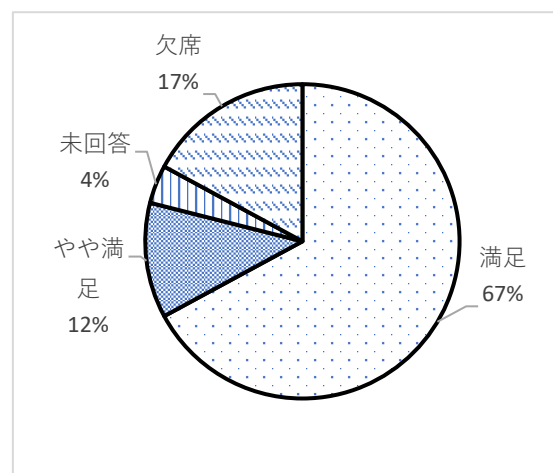
資料 24-3 手遊びうた



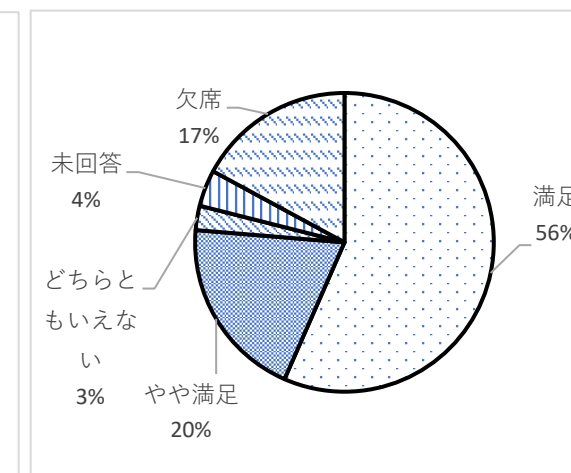
資料 24-4 サウンドスケープ



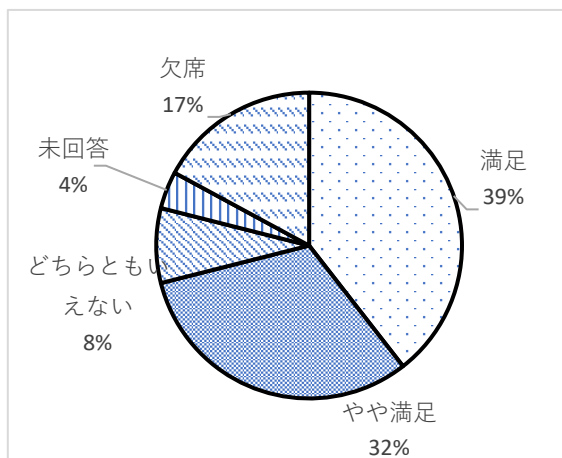
資料 24-5 音当てクイズ



資料 24-6 和楽器バンド



資料 24-7 《365 日の紙飛行機》



資料 25 アンケート調査自由記述欄の内容

授業のやり方が変わってついていけるかなあと思ってたけど、やっていくうちに、こんなに音楽たのしや!と思ってめっちゃ音楽の時間がたのしになった!

授業の冒頭にミニゲームをしたことで気持ちが一リフレッシュして楽しかったです。「はあって言うゲームを仲の良い友達とまた一斉者にやりました!」

少し音楽の授業が好きになりました。

昨年より授業がたのしくて、音楽の授業がたのしみになりました。

スーパースターとかで流れている曲でこれには何の楽器が使われているのかなと考えるようになった。

線にきうみをもった。

1、2年生より音楽の授業が12のしくなった。

なんかインタ×性あった
たのしい

おりの音とかに気がかけるようになった。

以外と音、てなってるな、てなつた。

想像するのが楽しかった(音を聞いて)

去年より音楽の授業が楽しくなった。

テストなんておぼつかないけど、
でも授業は楽しく考えてくださるの？
楽しいです

音楽の授業はとても楽しいです!!

出来れば楽器をあらかじめ授業もしてみたいと思った

いつも、ていねいに教えてくださり、ありがとうございます!!
先生の授業の内容はいつもおもしろい、楽しかったです!!

音楽の授業が楽しくなる。